ISSN 0387—3188

平成十二年七月三十一日発行

萬葉

萬葉集と近代短歌文学 …… 伊藤 博（一）
天平十九年春の家持と池主の贈答 …… 西 一夫（一九）
——「臥病」作品群の形成——
助動詞「り」の承接語形について …… 佐野 宏（四〇）
第五十三回萬葉学会全国大会開催要項 …… （五七）

萬葉学会

第百七十四号
平成十二年七月

第百七十三号　目次

「二上山賦」試論 …… 鉄野昌弘
「熊凝哀悼挽歌」考 …… 富原カンナ
天武諸皇子の出生順と続紀の序列基準について　武市香織
書評
伊藤博氏著『萬葉集釋注』（一―十一）を読む　中川幸廣
予告
会員名簿補訂

萬葉集と近代短歌文学

伊藤　博

一

昭和二十八年、奇しくも二人の歌人・文学者が相継いで世を去った。二月二十五日に斎藤茂吉が、九月三日に折口信夫（釈迢空）が逝いた。茂吉は七十二歳、折口は六十七歳であった（いずれも数え年）。正岡子規が短歌の革新を唱えて『歌よみに与ふる書』を書いたのは、明治三十一年。本稿では、この頃から昭和二十八年頃に至る歌を「近代短歌文学」と称することにする。当時の歌人たちがすべてそうであったように、『歌よみに与ふる書』が起こした気運に刺戟されつつ、茂吉は明治三十八年頃からの、折口は明治三十七年頃からの自作を公表することで歌人・文学者の出発点とし、爾来、時代を代表して並び立つに至った巨峰と認められるからである。

茂吉は、明治十五年五月十四日、山形県南村山郡堀田村大字金瓶（現上山市）で生まれた。この茂吉生誕の五月十四日に、例年、上山市において「斎藤茂吉記念全国大会」（山形県他主催）が行なわれている。今年平成十二年の第二十六回大会において、この伊藤博が、はからずも『萬葉集』と「近代短歌文学」とに関して話をすることになった。この話の内容は、これから古代学にいそしもうとする若い人々に対して何らかお役に立つような気がするので、以下、そのことについて書く。

「萬葉」第百七十二号の拙稿「秋詠三首――宿祢家持歌集の論――」について、編輯長の乾善彦氏はこう書いている。「本号の巻頭には、伊藤代表に先だっての全国大会での講演を纏めていただきました。講演では枕や脱線などにも興味深い話があったのですが、論文ではそれがよそ行きのかしこまったものになるもの。あたりまえのことですが、ここらにも萬葉集や古事記というものを考える道がありそうです」。枕や脱線を抜いてしまったのはいかにも惜しいとでも言いたげな口振りである。本稿は、前稿でいっさい抜いてしまった、その枕や脱線の代りをなすもの、あるい

は抜いてしまったことへの罪滅しをなすものとして読んでいただければ幸いである。

二

筆者が斎藤茂吉を知ったのは、昭和十四年七月、十四歳の時であった。時に、信州伊那中学(現伊那北高)の一年生。国語担当の先生が休まれた空き時間の代講として他の先生が来られた。その先生は臼井吉見と言い、戦後、総合誌「展望」(筑摩書房)の主幹となり、評論・小説の面で活躍された人である。教壇に立つや、先生はいきなり二つの短歌を板書された。一つは修飾の多い歌、一つは斎藤茂吉の、

あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり

という歌であった。臼井先生は、修飾の多い歌と茂吉の歌とを比較しつつ、茂吉の歌は日本の歌の秀逸の一つということができ、その原因は、主題が単純鮮明で、調べが高いところにある。文学では主題の確立を図ることが大切だが、短歌や俳句など短詩文学はとくに単純を心がけなければならないというような話をされた。たしかに心にしみこむ歌で、少年の生きてゆくべき姿勢を指し示しているように思われた。

その日の下校時、城下町高遠の矢島という書店に立ち寄ったところ、今日知ったばかりの歌人の書があった。斎藤茂吉『萬葉秀歌』上下。以前から置かれてあったのだが、今日の授業との関連で気がついたものらしい。帰宅して早速開いてみると、それは、

たまきはる宇智の大野に馬並めて朝踏ますらむその草深野

〔巻一・四〕　中皇命

の歌で始まっていた。茂吉の「たまきはる我が命なりけり」の「たまきはる」をもって歌い起こす萬葉歌がそこにあったのである。

萬葉歌を正確に理解する力はまだなかったけれども、古樸な得も言われぬ味があることは感じられ、それが茂吉の解説を読むことによって増幅されるのであった。

一首は、豊腴にして荘潔、些の渋滞なくその歌調を完うして、日本古語の優秀な特色が隈なくこの一首に出てゐると思はれるほどである。句割れなどいふものは一つもなく、第三句で『て』と置いたかとおもふと、第四句で、『朝踏ますらむ』と流動的に据えて、小林止となり、結句で二たび起して重厚荘潔なる名詞止にしてゐる。この名詞の結句にふかい感情がこもり余響が長いのである。作歌当時は言語が極めて容易に自然にこだはりなく運ばれたとおもふが、後代の私等には驚くべき力量として迫つて来るし、『その』などといふ続けざま

でも言語の妙いふべからざるものがある。長歌といひこの反歌といひ、萬葉集中最高峰の一つとして敬ふべく尊むべきものだとおもふのである。

などいう文章にすっかり酔い痴れてしまった。これほどの文章家が日本にいるのだというのが少年の実感であった。

これが、筆者の、『萬葉集』および「近代短歌文学」との出会いであった。そして、結局、この出会いが筆者の生涯を規定することになる。当時、筆者はよく本を読んだ。学校の図書室にある日本近代文学は詩集等をも含めてあらかた読破し、翻訳物もちょいちょい読んだ。標題に関する範囲で言えば、昭和十七年の正月、澤瀉久孝『萬葉集講話』を、継いで、斎藤瀏『萬葉名歌鑑賞』を、これは購入して読んだ。『萬葉集講話』は、萬葉集の特質は単純にありとし、日本人たるものは単純を理想とすべきであると力説していた。この「単純」ということは臼井吉見先生も言い、『萬葉秀歌』でも強調していた。我が身の生き方として「宇宙の意志に同化す」(今日筆者がよく言う「渓声山色に住む」と同じ)というようなことを考えたのは、これらの書の影響するところが大きい。

多読・乱読の青春を送ったのであるけれども、時勢は世を挙げて軍国主義一色。男子たるもの軍人を目指さなければ不忠の者とされた。筆者も陸海軍の学校をいくつか受験した。だが、あるいは視力であるいは学科で悉く落ちた。ついに逆説の心が働いた。この上は、文系で唯一徴兵延期の許される高等師範に進むしかない。選んだのは東京高等師範学校(現筑波大学)の国漢科。すぐれた教師になって、その合い間に小説でも書こうと夢見たのである。昭和十九年に入学し、二十三年に卒業した。高等師範は四年制で、卒業論文を書くことが課されていた。

何を対象とするか。これという蓄積のない身としては、結局、今までやや突っこんで学んだ『萬葉集』か「近代短歌文学」を選ぶしかなかった。入学した時に、書き下し文にして頭注本の『註解萬葉集』(佐藤保太郎・藤田寛)を購入した。この本には、後に知ることになる国歌大観番号は付されていなかった。萬葉集に関する資料は、かような書と上述の『萬葉秀歌』上下ほか数種類ぐらいしか持っていなかった。空襲日に激しく、『新訓萬葉集』も『白文萬葉集』も手に入らなかった。『萬葉集總索引』に至っては、それが存在することすら知らなかった。ただ、物理専攻の同級生に書物狂いがいた。当時の東京の書店はたいてい貸本屋になっていたが、そこに在る欲しいと思う本、とくに岩波の本については目がなく、何もかも強引に手中にしてしまう男であった。何を思ったか、その友人がある日、突然、佐佐木信綱の『萬葉集の研

究』(岩波書店)の第一冊をくれた。立派な研究らしいが、時の筆者には難解に過ぎ、どう役立ててよいのかわからなかった。それでも、心は『萬葉集』を対象に選ぶべく傾いていた。学校には、伝統として卒業論文には古典を対象とすべきだという風があったからである。

何の因果か、かの『註解萬葉集』には、その著者が枕詞と見なした箇所にすべて傍線が付してあった。初心の者にはまことに便利。その傍線に注意しながら読み進めて行った或る日、つれづれなるままに、たった一冊持っていた斎藤茂吉の自選歌集『朝の蛍』(『赤光』『あらたま』撰集)に眼を注いでいたところ、かの懐かしき「あかあかと一本の道とほりたり　たまきはる我が命なりけり」の「たまきはる」が萬葉歌における枕詞の用いざまと異なることに気づいた。萬葉歌では、枕詞はおしなべて五音句の中に据えられているらしい。だが、茂吉の「あかあかと」の歌では七音句の中に据えられている。そのことに気づいて、『朝の蛍』を考察すると、「たまきはる我が命なりけり」の類がいくつも存在するのであった。

歌の七音句に枕詞五音を据え、枕詞とそれのかかる語との結びつきに一語であるかのような緊張関係を与えて独自な声調を創り上げたのは、ひょっとして、和歌文学史上茂吉が最初ではないか、茂吉は萬葉集に作歌の滋養を仰いだ最大の歌人であり、茂吉の歌には日本古語(萬葉語)の使用が格別に目立つ。それでいて茂吉の歌は近代詩を超えて新しく、人の心をとらえてやまぬ深みや響きがある。その原因の一つは、茂吉が日本古語(萬葉語)を現世に力強く再生させている点にあり、さような再生の典型が彼の枕詞使用にあるのではないか、という着想を抱くに至った。追求の価値あるべし。卒業論文の題名は「斎藤茂吉の枕詞—萬葉集と関連して—」と決めた。昭和二十一年、三年生の四月のことである。

まず、かのテキストに付された傍線に添って、萬葉集を最初から読み進めた。枕詞は、どうやら柿本人麻呂に至って多彩となりいよいよ活力を発揮したが、以後は次第に枯渇し骨董化して行ったものと見られる。澤瀉久孝「枕詞を通して見たる人麻呂の独創性」(『萬葉の作品と時代』昭和16)の存在など全く知らない頃の観察である。無論、古今集以下名立たる歌集の調査に及ぶと、枕詞の形骸化はいちじるしく、まして、七音句の中に枕詞を据える歌など皆無であった。ただ、古今集の紀貫之の長歌に、

……たまのをの　みじかきこゝろ　おもひあへず　猶あらたまの　としをへて　大宮にのみ　ひさかたの　ひるよるわかず　つかふとて……　(巻十九、一〇〇二)

という例があった。一見、さすが貫之と思ったが、これは、語調

を整えるために苦しまぎれに「猶」を冠して七音にしたもので、革新の認識に即してのこととは見られないのであった。

ところが、茂吉に関して、資料は、論評の書、中野重治『斎藤茂吉ノート』を除いては、『朝の蛍』一つしか持っていなかった。その年の夏休みに、故郷のアララギ歌人を駆けずり廻り、第一歌集『赤光』(初版本)と第二歌集『あらたま』とを借り入れた。これが精一杯で、無謀にもこの二歌集だけによって「斎藤茂吉の枕詞」を論じようとするのであった。

二歌集には、七音句に枕詞を用いた歌が一〇首あった。次のごとし。

1小田のみち赤羅ひく日はのぼりつつ生れし蜻蛉もかがやきにけり　(『赤光』明治39)

2岩の秀に立てばひさかたの天の川南に垂れてかがやきにけり　(同右)

3とほくとほく行きたるならむ電燈を消せばぬばたまの夜も更けぬる　(『赤光』大正2)

4のど赤き玄鳥二つ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり　(同右)

5星のゐる夜ぞらのもとに赤赤とははそはの母は燃えゆきにけり　(同右)

6山ゆゑに笹竹の子を食ひにけりははそはの母よははそはの母よ　(同右)

7みなづきの嵐のなかに顫ひつつ散るぬばたまの黒き花みゆ　(同右)

8あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり　(『あらたま』大正2)

9海岸にひとりの童子泣きにけりたらちねの母はいづくを来らむ　(『あらたま』大正3)

10ふくらめる陸稲ばたけに人はゐずあめなるや日のひかり澄みつつ　(同右)

×　×　×

〝七音句の中の枕詞〟、これは茂吉において明確な認識に根ざしていたもので、長い日本の歌の歴史の中での茂吉の独創と断定してさしつかえなさそうである。けれども、近代短歌を詠んだ人はたくさんいる。その中に同じ試みをなしている人がいないとは限らない。その調査が必要である。だが、対象はあまりにも厖大である。資料もほとんど持ち合わせていない。研究のありかたとしては邪道に過ぎるけれども、ここで勘を働かせた。茂吉に相似る枕詞の工夫を行なっている歌人・文学者がいるとすれば、折口信夫しか考えがたいと。折口は、都会人・近代人でありながら古

代人になりきっており、したがって、茂吉よりもっと徹底した呼吸の中で日本古語(萬葉語)を駆使している人と認められたからである。

先に言及した物理専攻の書物狂いの友人が折口の歌集『海山のあひだ』と小説『死者の書』を持っていた。それを借りて読んだのが昭和十九年の暮の頃であったから、筆者が折口という偉人を知ったのはその頃のことであったろう。『死者の書』は晦渋であったが神秘であった。『海山のあひだ』も、その巻頭歌、

葛の花　踏みしだかれて、色あらたし。この山道を行きし人あり

以下、どこか遠い所に思いを致しており、その特異な気息に忽ち引き込まれた。昭和二十一年の夏休み前、二松学舎で古代文学講座があり、折口信夫の名があったので行った。どことない寂しさ、思索を含んだ表情でぽつりぽつりと話されたのが印象に残っている。しかし、当時折口に関する資料も何一つ持ってはいなかった。とにかく当面は歌集が必要なので、『海山のあひだ』はかの友人から借り、第二歌集『春のことぶれ』を、故郷の二つ山を越した村の小学校の教師から借りた。

はたして、折口の歌の中に、

水底に、うつそみの面わ　沈透(シヅ)き見ゆ。来む世も、我の　寂しくあらむ

という作があった。『海山のあひだ』の大正十年の詠。「うつそみの」は、古く「世」「命」「人」の枕詞とされていた語である。ここも、作者の意識としては、「現世の」の意を含みつつも枕詞として機能させているものと解せられた。

この歌は、茂吉の明治三十九年「小田のみち赤羅ひく日は」よりだいぶ後れるけれども、折口に枕詞再生の意識があることは歴然としていた。というのは、折口の枕詞には茂吉とは別途の計らいが施されていると見なされるからであった。折口は歌を分ち書きすることで、歌に折口独自の呼吸(調べ)を打ち出すことに執心していた。これが、短歌のありようというものを考慮した命がけの試みであったことは、『海山のあひだ』における「この集のすゑに」の文章によって明白。「だらしない者の優美をそのまゝついで、自身の呼吸や、思想の休止点を示す必要を感じない、のんきな心を持って居て貰うては困る」。

歌を分ち書きしながら、折口の歌は、枕詞とそれのかかる語(被修飾語)とに限ってそれを分つことはしない。少なくとも筆者が資料とした歌集の中の『海山のあひだ』ではそうであった。例えば、次のごとし。

1わがさかり　おとろへぬらし。月よみの夜ぞらを見れば、涙

おち来も　（明治43）

2常盤木のみどりたゆたに、わたつみの太泰寺（ウヅマサデラ）の書の　しづけさ　（明治44～大正4以前）

3天づたふ日の昏れゆけば、わたの原　蒼茫として　深き風吹く　（同右）

4臥（ネ）たる胸しづまりゆけば、天さかるひなの薩摩し　さやに見え来も　（大正6）

5うつそみの人はさびしも。すさのをぞ　怒りつゝ　国は成しけるものを　（大正11）

『海山のあひだ』にあっては、枕詞はすべて右の形で記されており例外はなかった。この事実は、折口が、枕詞とそれがかかる語との緊張関係を深く考えていたことの証拠で、枕詞について尋常一様に対していたのではないことを知らしめる。形は違っても、枕詞とそれがかかる語とを一体化しそこに意味や声律の緊張を託そうとしている点では、茂吉が七音句の中に枕詞を据えた意識と本質において異なるものではないと看取されたのである。だから、「水底に、うつせみの面わ」というような表現が茂吉に由来するなどとは簡単に言えない。「うつせみの面わ」は、折口において、枕詞とそれがかかる語とはけっして分かたないという気息のおのずからなる現われであろう。

『海山のあひだ』に対して、『春のことぶれ』では、おおむね四行書き・五行書きを貫き、その各行にも分ち書きがあって、折口の気息や間合いはさらに尖鋭になっている。だが、それ故なのであろうか、日本古語（萬葉語）の活用はふんだんに見えるものの、枕詞は一つも見えない。ただ、

桜の花のちりぐ〳〵にしも
わかれ行く　遠きひとり
と　君もなりなむ　（大正14）

のような新しい枕詞（序詞的枕詞）を用いた歌や、

庭に掃く　木々の葉音の、
つばらかに
今日は
心の　かなひゆくかな　（同右）

のような。古来の序詞の技法を、枕詞の場合とは逆に、古来のそれのごとく流れ続かないように工夫している（点が打ってある）歌もあったりする。

折口は折口特有の姿勢で日本古語（萬葉語）の蘇生ということに真剣に取り組んでいた。が、七音句の中に枕詞を据えて新たなる意味と声調を織りなそうとする工夫は茂吉をもって創始とすべきであろうと結論した。ただ、卒業論文指導の時間に（同級生二十五

名)に、担任の石井庄司先生(上代文学者・国語教育者・俳人、澤瀉久孝高門の一人)から、後には相別れることになったけれども、折口は最初アララギに所属し、茂吉とは互いにその才能を認め合い、切磋琢磨した仲だということを教えられた。二人のそれぞれの枕詞に関する創意工夫は、日本古語(萬葉語)の復活を尊重し実践した二人の気息の響き合いによって織り成された面があったかもしれぬことが考慮された。

卒業論文「斎藤茂吉の枕詞」は、以上のごとく、枕詞の歴史の中で折口信夫を引き合いに出しながら、茂吉の歌における古語効用の由来と成果を、無論一首一首の具相に即しながら論じたものであった。関連して、譬喩(「ごと」「ごとし」の在りようなど)や地域・時期と枕詞との関連なども考察したけれども、今は触れない。着想の先行に基づく、きわめて限られた資料による調査から大胆な結論を導いた姿勢は学究の本道に背いており、今となっては若気の至りとしか言いようがない。だが、昭和二十八年からの『斎藤茂吉全集』、昭和二十九年からの『折口信夫全集』によって、その後、時をかけつつ二人の作品・評論を読み通した現段階において、往年の見方に大きな軌道修正を与えないですむらしいことを知ったのは、ひそかなる安堵である。

茂吉における七音句の枕詞は、その後のものとして、次のごときを見る。

11塩づけにしたる茸を友として食めばあしひきの山の香ぞする
(『ともしび』昭和2)

12山のまにしづみ堪ふる瀞の色うつせみの世のよろこびならず
(『白桃』昭和9)

13山にあふれて鳴きしきりつる蟬のこゑあかねさす日のいづるころ止む
(『暁紅』昭和11)

14大きなる勝に徹らむみことのり高ひかる日のあきらけくこそ
(『補遺』昭和17)

15真珠湾攻撃したる空兵のそのたらちねの母をわれ知る(同右)

茂吉には、一方、主として晩年のことだが、

あかねさす晝のひかりにぬばたまの夜の暗きに忘れておもへや
(『補遺』昭和17)

ははそはの母おもほゆるちちのみのの父おもほゆる山形あがた
(同右)

あかねさす晝の時のまもぬばたまの夜のたまゆらも戦やまず
(同右)

など、一首に二つの枕詞を用いる歌がしばしばある。これらは、彼が尊敬して止まなかった柿本人麻呂の、

あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隠らく惜し

も　　（萬葉集巻二、一六九）

などに学ぶところがあってのことであろう。一首に二つの枕詞は近代短歌文学にあっては稀有のことで、こうしたことどもも茂吉の七音句の枕詞と関連があり、結局は歌の単純化や声調ということに繋がってゆくのであろう。

一方、折口の歌に関しては、七音句の枕詞として、たった一首ながら、

今の間に　たまきはる命思ほゆる　らぢををとめて、暫し居るなり　（『天地に宣る』昭和16）

を見出した。折口は、茂吉ほど枕詞を多用しない。しかし、他の近代歌人に比べれば多い（例えば、吉井勇のような歌人でも、昭和十六年前後の歌を収める『朝影』に、初句に限って比較的多数枕詞を用いているが、七二二首中八首にすぎない）。

いくさきみ武田がのちに　はかなくもわび歌おほし　あはれ祐吉　（「短歌補遺」『全集』第廿二巻）

いくさびと武田が子らの　あはれなる。鎗　とり知らず　歌にしみつく　（同右）

など戯歌と覚しき歌の中に、新しい枕詞を鮮かに用いている。そして、この類においても枕詞とそれがかかる語とを分ち書きにはしていない。

ただ、次のような場合も存するのであった。

(1)いさなとり　海の幸せる大地（ダイチ）の子　夜あけの磯に　暗くひしめく　（「短歌拾遺」）

(2)神風の　伊勢の御祖は、大御心やすらにませと　宣りたまふらし　（同右昭18）

のように記す歌も存するのであった。右は、枕詞とそれがかかる語とを分ち書きした折口の歌として筆者が発見できた例外であるが、いかなる次第でこのように記されたのかわからない。もっとも、(1)の歌には、

いさなとり　夜明の磯に大地（ダイチ）の子　船ら見おろし　海の幸□る

のような案もあったという。折口においていまだ定着を見なかった歌であるらしい。原因はここにあるものか。後者については、ついに考えるところがない。

その後五十数年を経ながらも、近代短歌文学の隅々まで読み尽くしたとは言えない。しかし、注意して見来った限りにおいては、日本古語（萬葉語）に新しい光をあてた人、したがって枕詞に対する関心や創意を注いだ人として、この二人の歌人・文学者ほど強靭であった人は存在しなかったと言ってさしつかえないと思う。

× × ×

実は、「斎藤茂吉の枕詞」は、大きな苦悩を背負いながら書かれた。『萬葉集』と「近代短歌文学」について筆者を啓蒙し文化衝撃を与えた当の臼井吉見先生（以下文学史上の人物として臼井吉見と称する）が、昭和二十一年五月の「展望」に、主幹として「短歌への訣別」と題する一文を発表されたのである。この文章は、萬葉の伝統を大きな滋養とすることによって「短歌における近代の道」を開こうとしたアララギ派、とくにそのことによって「短歌の限界を乗り越えるところまできている」斎藤茂吉を主たる対象に据えながら、短歌形式の行きづまりを論じた上で、「短歌形式になじむ限り、合理的なもの、批判的なものの芽生えの根は、つねに枯渇を免れぬわけにはゆかぬ」とし、「今こそ我々は短歌への去り難い愛着を決然と断ち切る時ではなかろうか」と述べることで、「民族の知性改革」を求めたものであった。この論は時勢に大いなる波紋を投じた。無論、七年前に、茂吉を通して短歌文学の美しさや気高さを教え込まれた筆者にとってはとくに激しい衝撃であった。七年前と同じ人の発言とはとうてい信じられなかったのである。それは、卒業論文の題目を「斎藤茂吉の枕詞」と決定した直後のことであった。

臼井吉見のいうように、日本民族が今こそ短歌なるものから訣別すべきものであるなら、今さら斎藤茂吉などを対象にして、日本の歌に関する論文を書いても意味がない。茂吉を取り上げるからには、自分なりに臼井の論述を克服しなければならない。当時、筆者は、友人二人とともに「焔（ほのほ）」と称する同人雑誌を出していた。例によって三号雑誌に終わったけれども、そこに「歌の命脈」と題する文章を寄せた。

㈠多様な記紀歌謡や東歌・防人歌を多数収録する萬葉集から窺い知られるように、「歌」（短歌）は日本民族が生まれながらにして持っていた気脈・呼吸であり、長い歴史の中で日本人が日本人の心情、日本人の志を示すための具として築き上げてきた詩形式である。

㈡したがって、今日においても、職業の別なく、老若男女の別なく、日本人なら誰でも歌を詠むことができる。つまり、誰でも作者たり得、誰でも読者たり得るのが短歌であって、かような古典の格式が民族の隅々まで普及している国は世界でも類がない。短歌は格式に支えられた日本の大衆文学なのである。

㈢無論、愚かなる短歌からは訣別すべきである。だが、短歌は二等辺三角形の頂点の部分に当たる。その底辺を深く凝縮し高く純化した形式が短歌である。故に、底辺という〝生活宇宙〟を、日本人が大きな視野をもって充実し続けるならば、

歌は日本人の心情・志を言い表わす様式として命脈を保つ。日本民族は、この類の歌からは訣別すべきではない。[1]

というのが、その文章の要旨であった。

これは昭和二十一年の夏休みに記したものだが、その年の十一月、綜合誌「世界」に桑原武夫の「第二芸術――俳句について」が出て、臼井の「短歌への訣別」の論が出た時以上に世の騒ぎを招いた。後になって、臼井の論に対して短歌愛着の苦悶に支えられていると評するむきのあることを知ったりしたが、当時の筆者には、そのようにはとうてい受け取ることができなかった。さような提言も大切で、日本人たるもの、短歌の在り方に対する自己批判は常に続けてゆかなければならないとは思ったけれども、「短歌への訣別」の論は、戦後の時流に乗った、あるいは時流を先取った気ままな発言としか思えなかった。まして、桑原の論は、本人に短歌・俳句への本質的な理解があるとも思われず、西洋の小説のみが「文学」だとする立場からのきわめて軽い発言としか考えられなかった。

以下に述べるところは、その後の学習によって知ったことであるが、短歌形式に対する日本人の疑問は、明治十五年の『新体詩抄』(外山正一以下)に始まり、明治十八年の『小説神髄』(坪内逍遥)によって拍車をかけられたという。そして、臼井の「短歌への訣別」に至るまでに、おもに歌人の側から、折々に杞憂論・否定論・滅亡論が出た。その中で最も心を打つのは、折口信夫の「歌の円寂する時」(「改造」大正15、『全集』第廿七巻)である。折口は書く。真の意味の批評(文学の哲学者の批評)が確立せず、歌よみの人間が不出来の状態が続く以上、この世に生まれたなべてのものと同様、歌にも命の限りがあるから、「円寂する時」が来ると。

この論は、通常、短歌滅亡論の一つとされているけれども(臼井吉見『ほたるぶくろ』など)、違うと思う。折口は別にこうも書いている。五七五七七と言う短歌形式が滅びることはまずあるまい、だが、「文語形式」に支えられることなく、「読者のない文学」に終始する限り、在るべき短歌の円寂する時が来ると。このことは、「円寂する時」の「続篇」の中で、「私は短歌の滅びることを言ふたのは、愛着更に、新しきがためであつた。明日の文学を思ふからであつた」と言っていることによっても明らかである。折口の論はつまりは逆説で、「歌」が「歌」として命脈を保つためにはいかに対すべきかという論なのであった。この論には、筆者の若き日の主張を先取っている面がいささか存在し、筆者としては喜びを禁じ得ない。

一方、斎藤茂吉はあれだけの論客でありながら、

短歌ほろべ短歌ほろべといふ声す明治末期のごとくひびきて

という歌を残す以外、言及のあることを知らない。右の上三句は、臼井や桑原の論を下地に置いての表現であり、下二句「明治末期のごとくひびきて」は、おそらく明治四十三年の尾上柴舟『短歌滅亡私論』に思いを馳せての表現であろう。この下二句には、短歌滅亡論に対する不信・からかいの念がある。「論」は茂吉にとって物の「ひびき」でしかない。折々に起こる論であるが、十年一日の言であって実がない、さようなことを考えること自体が笑止であるという確信が見える。茂吉は、別に「新時代の短歌」という文章の中で、「短歌は短歌として優秀なるものを目懸けねばならぬ。世の或人々は、何か、三十一文字かと冷淡にいふ。しかし短歌は三十一文字の芸術であることを予は瞭然と云つておく」（『全集』第十六巻）とも言っている。確信のほどを見るべきである。

本林勝夫『斎藤茂吉の研究――その生と表現』に、茂吉にとって短歌とは何であったかを論じる中で、次の発言を見る。「茂吉がこの短歌形式に生を託しながら、いわゆる歌人の世界を抜く存在たり得たのは、何よりも短歌に執し、歌人に徹底したからと言えるであろう」。けだし、至妙の言と思われる。日本文化が世界文化であるためには、まず徹底して日本文化でなければならないのである。

（『白き山』昭和22）

× × ×

昭和二十二年十月、卒業論文を提出した後、筆者は、萬葉集を研究するために、京都大学教授澤瀉久孝博士の門に入った。こうなる引金が、既述の石井庄司先生が澤瀉久孝高門の一人で、澤瀉学についてしばしば話題にされた点にあったことは確実である。だが、より深い契機は、臼井吉見の「短歌への訣別」に対して、「短の命脈」につき自己の立場を見定めた点に求められる。日本民族にとって「歌」とは何であるかを徹底して問い直す必要がある。「歌の命脈」に述べた考えや、そこに立脚して物された「斎藤茂吉の枕詞」論が成り立たないならば、我が半生は無に帰する。自身に与えられた能力から見て、この点を極めつつ生きるほかにすべはない。極めるためには、「萬葉集」をとことん読み解かなくてはならぬ。『萬葉集』は日本の「歌」、日本の「文化」の原郷だからである。それがためには、萬葉学について最も確かなる学者に就かねばならぬ。京都に赴いたのは、昭和二十四年四月であった。

「柿本人麻呂と女性」――これが昭和二十四年度の澤瀉久孝教授の講義題目であった。男女共学制の取り入れられた戦後間もなくのこととて、英仏独文学専攻の女子学生を含めて、全学から三百人ほどの学生が集まった。教室の壁に立つ学生までいた。名に

し負う萬葉学者である。人麻呂と女性に関し流麗なる講義が繰り広げられるものと、誰しもが期待したのであろう。

しかし、講義は案に相違した。巻二、二〇七～二一二番の人麻呂挽歌を訓むという内容で、講義は、その題詞「柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血哀慟作歌二首并短歌」の解読から始まった。「柿本」の「柿」には「杮」と伝える写本がある。が、何々本のこの伝えは「柹」の俗字で、「柿」とは本来異なる樹木である。「本」は「下」と伝えるかくかくの写本もあるが、集中しかじかの用例によれば「下」はシタ、「本」はモトと訓むべく、「下」は誤伝と認められる。これで二時間一単位の講義は終わる。

次の時間には教室はずいぶんがらんとした。はなやかな女子学生の姿はほとんど消えている。「朝臣」の説明があって、継いでは「人麻呂」。これが長かった。「人麻呂」と三字で記す写本と「人麿」と二字で記す写本とに分かれるが、後者の方が多い。何々本には「人麿」、何々本には「人麻呂」と、写本の名が経文のごとく次々と指摘され、上代人の記名の詳細な例証、古写本の質の論証に及んで、結局「人麻呂」に拠るべきだということになる。学生はいつしか数えられるほどに減った。一事が万事で、以下「妻」は単数か否か。外国語ではSを付して複数を表わすが、日本語は簡潔でそういうややこしいことはしない、「妻」一語で単数をも複数をも表わすと説いて、集中の用例を引き合いにする。

当時、京都大学は二学期制であったが、題詞の解読だけでほぼ一学期が終わってしまった。二学期に入って「天飛也軽路者」の詳しい訓詁が始まった時には、学生は四十名ほどとなり、しまいには国文専攻の二十数名に限られてしまった。それでも、教授の表情には何の変化もない。

無味乾燥、これに過ぎたるはなし。上代専攻の学生たちすらこう言い合った。けれども、この講義を通して、文学研究は一にも二にも言葉であり、一字一句もゆるがせにしてはならぬということを、一同、身に沁みて学んだ。

昭和二十六年五月、当時三回生であった三人の上代専攻の学生のあいだに、澤瀉先生を戴いて「萬葉学会」を創設する話が起こった。小島憲之先生を通して申し出たところ、許しがでた。早速、「萬葉学会発会の辞」と「萬葉学会会則」の原案を作って、三人で先生の御宅に伺った。先生は、全体をしばらく見つめられた後、「会則」の「投稿規定」における一行「採否は編輯部に一任すること」の「一任すること」を「一任のこと」に改めた上で、「これでよいでしょう」と言われた。「一任すること」から「一任のこと」へ。なるほど、「一任しなければならぬ」から「一任されたい」の意に変わり、編輯部の投稿者への姿勢が柔らかになる。

ここにも澤瀉訓詁学があり、特有の人格があると、教えられた。

茂吉や折口に心酔してきた身にとって、澤瀉訓詁学はすこぶる異様であった。ここには批評も鑑賞もなく。まして、日本の「歌」の命脈に対する視野もなく、ただ、萬葉のための萬葉学があるだけであった。これでよいものか。悩んだ。しかしその果に覚ったことは、この無味乾燥な学に没頭し、それをまず身に附着させることだということであった。初志を忘ぜず、澤瀉訓詁学に傾倒しその方法に徹するならば、道はおのずから開かるべしと。かくして、やがて筆者が確認するに至ったのは、澤瀉訓詁学は、いかなる時代のいかなる国の作品の解読に対しても、基本の「方法」となり得るということであった。

これは、澤瀉門下の誰しもがおのずからに悟ったことであったはずである。その一つの確実な証拠として、筆者は、清水克彦『山椒大夫読例』(平成3、世界思想社)を挙げる。この書の帯には、「『さんせう大夫』伝説を近代文学として見事に蘇生させた森鷗外　その文学世界構築の妙を一語一語に即して開陳し近代文学注釈に新たな道を切り開く」とあるが、内容を読み進めれば、これは帯にありがちな宣伝ではけっしてなく、近代文学の注釈として稀有の存在であることを実感できる。一例を示したいのだが、紙数が許さない。『山椒大夫』の中で最も難解と思われる部分を解釈した一二頁から一七頁に至る解読が圧巻。全体、澤瀉訓詁学が遺憾なく消化され、清水解釈学を達成している。ぜひに就いて見られたい。

筆者自身も澤瀉訓詁学から得たものは少なくない。作品の解釈にはまずもって言語の「場」を考慮し、真の意味の鑑賞と批評にまで高めないことには、作品を読んだことにはならないというのが、逆説的に得た大きな成果であった。作品は、少なくとも、最初の次元にあっては、題詞とか左注とかの外部事情、さらには作者が誰かということからも離れて、まずはその表現性をみずからの眼と心で追究することが肝要というのも学び得たことの一つである。筆者の『古代和歌史研究』八巻、『萬葉集釈注』十三冊は、そのような立場と方法に支えられて成ったものである。

三

いつしかも日がしづみゆきうつせみのわれもおのづからきは
まるらしも

右は、斎藤茂吉の最終歌集(第十七歌集)『つきかげ』所収の歌で、他界する一年前、「あららぎ」二月号に掲載されたという。だから、おそらく昭和二十六年末頃の詠と推測される。『全集』の初版にはうしろから四番目にあるが、さまざまな事情あって第

二版からは最後に置かれている(北杜夫『茂吉晩年』参照)。茂吉は、昭和二十七年の二月頃から体調とみに悪化し、まともに歌を詠み得る状態になかったというから(斎藤茂太『茂吉の体臭』など)、この一首を茂吉の生涯を括る歌と見ることに大きな誤りはないであろう。北杜夫『茂吉晩年』によれば、「いつの間にか枕元の紙に書いてあった」(斎藤輝子)という。

この歌では、結句の「きはまるらしも」が大切だと思う。「らし」はほとんど確実なことを推量する助動詞で、推測した対象を客観視する働きがある。うつせみ我れが遅からず極まり果てることを茂吉は静かに想い見ている。この「らしも」に、初句の「いつしかも」と第三句の「おのづから」とが照応し、二つの句はその「らしも」に流れ落ちるようになっている。関連して、第二句が「日はしづみゆき」ではなくて「日がしづみゆき」であることも重要である。ふと見たところ、「日がしづみ」行きつつあり、ごく自然、ごく静かなる天体の動きに応じて、「うつせみのわれもおのづからきはまるらしも」と行く末が思われるのである。一首は、すこぶる深遠な認識に支えられながら、何の構えもないところが妙というべきであろう。

ここには、人間の力量がある。我が生涯に対する達成観がにじみ出ている。筆者は思う。この一首を詠んだ時、茂吉は、かの『あらたま』初頭の、

あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり　(大正2)

かがやけるひとすぢの道遙けくて風はかうかうと吹きゆきにけり　(同右)

などに思いを寄せていたのではなかったかと。その道に志した明治二十九年二十五歳の時から五十年に及ぶ歌人生活は、茂吉において「あかあかと」「ひとすぢ」に続く「一本の道」以外ではなかった。一首にその「道」の達成観の存することを思う時、そこに、若き日のかの志高き歌々に対する反応が潜んでいるように感ぜられてならないのである。

上田三四二は『つきかげ』が異様な混濁を漂わす歌集であることを指摘し、茂吉晩年の秀詠を収める『白き山』に続いてこの歌集があるのは読者をまどわせると言っているという(「晩年の茂吉」短歌研究昭和41・2)。しかし、この見方は老いの深みからは離れて存在する人のものでしかないことを、「いつしかも日がしづみゆき」の歌が教える。先掲本林勝夫『斎藤茂吉の研究』には、上田の発言を批判して、「その混濁のままに生のともしびが衰え、消えゆくさまを歌っている点では、これまた稀有な最終歌集と言えるのではあるまいか」と述べている。「いつしかも日がしづみ

ゆき……われもおのづからきはまるらしも」の言葉づかいを尊重するが故に、筆者としてはこの見方に与する。『つきかげ』が存し、それが「うつせみのわれもきはまるらしも」の歌で終焉を遂げるのでなければ、歌人茂吉の生涯は鎮まらないのではないかと思われる。(2)

一方、ずっと引き合いにばかり出してきた折口信夫は、既述のとおり、茂吉が逝った半年後の九月三日に他界した。その最終詠ははっきりしていて、

雪しろの　はるかに来たる川上を　見つゝおもへり。斎藤茂吉

（「遺稿」三『全集』第廿二巻二一六頁）

という箱根の別荘での詠が最後となった。この間の事情は『全集』では不明。岡野弘彦『折口信夫の晩年』（昭和44中央公論社）によってはじめて知ることができる。同書には、一首をめぐって次のように記す。

八月の十六日には、角川源義氏と牧田茂氏がたずねてこられた。二人が湯に入っていられる間に、角川さんの車の運転手が山形県の出身だと聞かれた先生は、「この間私たちをここまで運んでくださったお礼にあなたに色紙を書きましょう」といって、しばらく考えていて、

雪しろの　はるかに来たる川上を　見つゝおもへり。斎藤茂吉

と書かれた。「雪しろは御存じでしょう。雪しろの水のことです。これ角川君に取られないようになさいよ。あぶないなあ。」と笑いながら渡された。これが先生の最後の詠となった（二四九頁）

折口は、この翌日その運転手の心ある車さばきによって箱根を下り、九月三日、東京の慶応病院で亡くなっているから、他界十八日前の詠ということになる。

右岡野氏の文章によれば、折口が茂吉のことを歌って人生を閉じたのは偶然のことにすぎない。しかし、先の石井庄司先生の示教のごとく、この二人の歌人・文学者が、真の批評をもとに互いの能力を認め、畏敬と信頼の念を抱き合っていたことは、『折口信夫全集』（第廿五巻・第廿七巻）や『斎藤茂吉全集』（第十四巻）によって明らかであり、先の岡野弘彦『折口信夫の晩年』にも、二人の人間関係についてほろりとするような記述がいくつかある。こうしたことに思いを致すならば、この偶然は深い宿命を感じさせる。

茂吉の『白き山』に最上川秀吟がある。中で、

最上川逆白波（さかしらなみ）の立つまでにふぶくゆふべとなりにけるかも　（昭和21）

がよく聞こえている。「逆白波」は茂吉の造語で(吉田漱『〝白き山〟全注釈』参照)、人麻呂の「夕波千鳥」や家持の「斎笹群竹」を想起させる。雪しろ水の逆波をいう印象すこぶる鮮明な言葉であるから、折口は、その折、少なくとも、「最上川逆白波の立つまでに」の歌に想いを致しながら、今その波を見ている心境において茂吉を偲んだものにちがいない。「雪しろ」についてとくに解説を加えたのも、そのことの一端の証となろう。事実、折口はみちのくに旅人であったことがいくたびかあり、最上川をしばしば見ている。

宿命と言えば、折口に、

かくばかり　さびしきことを思ひ居し　我の一世の、過ぎ行かむとす

という歌がある。『遠やまひこ』(『全集』第廿二巻)に収められた昭和十五年七月の作である。他界する十四年も前の詠だが、茂吉最終詠とあまりにもよく似通うことに驚かざるを得ない。折口の歌は、常に向こうに異界を見ているようなところがあるけれども(折口自身、自分の歌を「くせ歌」と言っている)、それにしてもよく似ている。そして、『全集』では、右「見つゝおもへり。斎藤茂吉」の歌の四首前に、

雪しろき庭に入り来て、土深く　くづるゝものゝ音を聞きたり

という作が収められ、直前には、

かくひとり老いかゞまりて、ひとのみな憎む日はやく　到りけるかも

が据えられている。山形出身の男性に遇わなかったなら、問題の歌は存在し得なかった。けれども、この頃、折口の気持がつい半年前に逝いた茂吉へと及んで行く天の導きのようなものがあったと思わないではいられない。

筆者二十一歳から二十二歳にかけて、「枕詞」なるものを通して、直感の赴くままに相並ぶ歌人・文学者と認識した二人の先達が、実質、近代の巨峰として並び立つということを、五十年後の現在において確認できることについては、「縁」(えにし)なるものをしみじみ思う。斎藤茂吉の『白桃』に、

浪に近くわが居りしかば山かはのひまなき音の縁(たどき)をぞおもふ　(昭和8)

という歌がある。「縁」とは不思議なものだ。「神」と言ってもよいかもしれない。そして、思いを返せば、臼井吉見は、二重の意味で、我が人生の「縁」の人であった。この恩人もつとに故人である。

去る三月二日の東京朝日の夕刊「単眼複眼」の項に、第十一回

歌壇賞を受けた二人の歌人（田中拓也・渡英子）に関する記事が出た。二人が古代歌謡や萬葉集を多く学びその命を呼び込んだ歌によって歌壇賞を得たことを述べたのち、記事はこう述べる。「短歌の世界における口語優位の傾向にもかげりが見え始めた観がある。身近なことばは短歌を親しみやすいものにし、レトリックや乱調の面白さで意表をつく技巧も育てた。だが、パターンは出つくしたのではないか。今回受賞の、古典和歌風の諧調は快く新鮮だった。次の流れをつくるかぎは、古き良きものを見直すなかにあるのではないか。」と。

現代短歌にも、茂吉・折口たちの築いたものが新しい形で甦りつつあるらしい。岡野弘彦の個人雑誌「うたげの座」（既刊五号まで。不識書店）が、格調すこぶる高くしてしかもわかりやすい、くさぐさの創作を掲げ続け、〔まれびとの座〕〔あるじの座〕〔つどいの座〕と分類する最後の座に、中学生や高校生たちへの短歌の場を広く提供しているのも、歌誌「ＮＨＫ歌壇」における「三十一文字の青春」などとともに、明るい将来を告げる。

日本の「歌」は、日本人の〝生活宇宙〟が充足して存する限り、命脈を失わないと信ずる。その原郷が『萬葉集』である。われわれは、日本民族の末長い将来を見つめて、質高き〝萬葉学〟を築き続けなければならない。

（二〇〇〇年四月二十日稿）

注

（1）ここに言う「二等辺三角形」は、現在では「円錐形」と称する方が適切であったと考えている。それの方が底辺の面積がはっきりし、〝生活宇宙〟の意味するところが具現化される。

（2）最初に述べた第二十六回「斎藤茂吉記念全国大会」において、大会を結ぶ行事として尾崎左永子氏の「茂吉短歌と声調」と題する講演があった。その中に、「若い頃には『つきかげ』は私にとってよくわからない歌集であった。だが、現在ではこれほど味わいの深い歌集はないと思っている」という意味の発言があったので、紹介しておく。

〔追記〕

日本の歌の命脈ということを考えるとき、たくさんの歌人たちが詠んだ〝戦争詠〟というものを避けて通るわけにはゆかない。本稿ではこの面には立ち入らなかったけれども、考えがないわけではない。それについては、折をまつ。なお、筆者が影響を受けた歌人・文学者として、茂吉・折口のほかにもう一人窪田空穂がいる。本稿では都合により取り上げることができなかったが、この点についても、折をまつことにしたい。

（いとう　はく・筑波大学名誉教授）

天平十九年春の家持と池主の贈答

――「臥病」作品群の形成――

西一夫

一

守大伴宿祢家持贈二掾大伴宿祢池主一悲歌二首

忽沈二枉疾一、累旬痛苦。禱二恃百神一、且得二消損一。而由身体疼羸、筋力怯軟。未レ堪二展謝一、係恋弥深。方今春朝春花流二馥於春苑一、春暮春鶯囀二声於春林一。対二此節候一、琴罇可レ翫矣。雖レ有二乗レ興之感一、不レ耐二策レ杖之労一。独臥二帷幄之裏一、聊作二寸分之歌一。軽奉二机下一、犯レ解二玉頤一。其詞曰、

春の花今は盛りににほふらむ折りてかざさむ手力もがも
（17・三九六五）

うぐひすの鳴き散らすらむ春の花いつしか君と手折りかざさむ
（三九六六）

二月廿九日、大伴宿祢家持

忽辱二芳音一、翰苑凌レ雲。兼垂二倭詩一、詞林舒レ錦。以吟以詠、能蠲二恋緒一。春可レ楽、暮春風景最可レ怜。紅桃灼々戯蝶廻レ花儛、翠柳依々嬌鶯隠レ葉歌。可レ楽哉。淡交促レ席得レ意忘レ言。楽矣美矣。幽襟足レ賞哉。豈慮乎、蘭蕙隔レ藂、琴罇無レ用。空過二令節一、物色軽レ人乎。所レ怨有レ此、不レ能二黙已一。俗語云、以レ藤続レ錦。聊擬二談咲一耳。

山峡に咲ける桜をただ一目君に見せてば何をか思はむ
（三九六七）

うぐひすの来鳴く山吹うたがたも君が手触れず花散らめやも
（三九六八）

沽洗二日、掾大伴宿祢池主

大伴家持が池主に詠み贈った「悲歌」と題される短歌二首は、家持が前年の天平十八年に越中国守に着任して以来、萬葉集に残るなかでは最初の贈答作品にあたる。これをはじめとする都合三度に亘る詩をも含めた贈答では、贈り届ける際に添えられた書簡文までが作品の一部として取り込まれている。ふたりには、この他にも歌に書簡文を添えた贈答（18・四〇七三～四〇七九、四一二八

～四一三三）が存する。[1]それらの贈答作品では、書簡文によって、歌のみでは知りえない贈答の次第や背後にある事情などがあきらかにされている。とすれば、この「悲歌」贈答に書簡文を伴わせているのは、この贈答にとってそれが欠くことのできない要素を有していると推察される。以下、この「悲歌」をはじめとする贈答作品群を取り上げ、歌と書簡文の交渉、さらには贈答作品の相互関連の検討を通して作品群形成のありようをあきらかにしたい。

まず「悲歌」贈答で、無視しえないのは、家持が病臥している状況が書簡文で具体化される点である。「悲歌」と題された二首の短歌では、「折りてかざさむ手力もがも」（三九六五）「いつしか君と手折りかざさむ」（三九六六）と病臥のさまを具体的に表現せず、いずれも願望として暗示するにとどまる。病臥する家持の姿と病状は、「忽沈二枉疾一、累旬痛苦。禱二侍百神一、且得二消損一」と、書簡文の起筆部分で記される。病に呻吟してすでに日数を経て、百神への祈願によって快方に向かいつつあると述べる起筆表現には、

忽嬰二況療一、伏二枕数旬一。頼二以諸善所一加、不レ至二全重一。
（杜友晉『書儀鏡』S.329「謝二平懊問一レ疾書」）

冷熱虧方、遂嬰二疾積一。頼二以諸仏加一レ被、漸得二痊除一。
（同右「謝二尊人問一レ疾書」）

など、病に関連する書儀との類似が認められ、家持の起筆も、これらの類型表現を念頭においたものと解して問題はないだろう。「悲歌」では、題詞・末尾注記によって、詠作の事情があきらかにされているとは言い難く、書簡文の存在は、歌の解釈に重要な位置を占めるといえる。

この書簡文は前後二段からなり、前半部分で家持は、起筆に続けて「身体疼羸、筋力怯軟」と、直前の表現とは異なり、なお回復に時間を要するがごとき状態を述べる。そして前半の表現は、「未レ堪二展謝一、係恋弥深」と、池主への慕情を募らせる記述に展開して結ばれる。家持がこのような心情をあらわにするのは、先掲の書儀起筆につづく次のような表現から、すでに芳賀紀雄氏が示唆されているように、[2]「悲歌」に先立ち、池主が家持に書簡文を贈っていたからだと考えられる。

毎レ沐顧レ撫、屢賜二芳音一、但愧二於心一、何階二答賀一。因レ使附レ
此、不宣謹状。（杜友晉『書儀鏡』S.329「謝二平懊問一レ疾書」）

自顧何人、蒙二賜問及一、不レ勝二惶悚一。駆レ馳有レ限、未レ由二拝奉一。謹因レ使次、謹奉レ状。不宣謹状。
（同右「謝二尊人問一レ疾書」）

これらは、相手から書簡文が寄せられ、それに対して十分意を尽くさないけれども、返事を送る旨を述べて書簡文を結ぶ内容とな

っている。加えて、書儀題目に着目するならば、『新集諸家九族尊卑書儀』(P.3502v)では「朋友有レ疾相問書」に対して「答書」が存し、杜友晉『新定書儀鏡』(P.3637)でも同様に「問レ疾書」に対して「題如レ前(=問レ疾書)答書」が存するという、病臥に際しての書簡文贈答の類型化が認められるのである。

つづく「方今……」以下の後半部分では、春の美景を描き、その景物に対して「対二此節候一、琴罇可レ翫矣」と遊宴のあるべきことを肯定しながらも、なお身体の思うにまかせない状態を「雖レ有二乗レ興之感一、不レ耐二策レ杖之労一」と述べる。家持は、病臥から十分に立ち直りえていない姿を、書簡文で執拗に繰り返し、その鬱屈した心情を「悲歌」に託していると推察できる。

そうした身体の不如意なありさまは、「悲歌」の末尾注記の日付と以後展開する贈答から知られるように、三月三日に予定されていたであろう遊覧と関わる。(3)ならば、前半で「身体疼羸、筋力怯軟」と記し、後半でも「独臥二帷幄之裏一」と自由にならない嘆きと独り病床に臥す苦しみを記すのは、三日遊覧への参加辞退の意を伝えようとしたためと解釈するのが穏当であろう。また先立つ池主の書簡文は、病気見舞いに三日遊覧の誘いを含んだ内容であったと推定され、それぞれの内容に対して、月が改まる前に、家持は意を尽くした書簡文を「悲歌」に添えて贈ったと考えられる。なお池主と病臥する家持との間で交わされた贈答では、「悲歌」に至って書簡文が残る。これは、恐らく、「悲歌」贈答に先立つ遊覧の誘いに際して、池主が歌を詠まずに書簡文のみを送ったからだと忖度される。

家持の「悲歌」については、鐵野昌弘氏が、中国の六朝期より伝統化しつつあった「臥病(疾)」を主題とする詩文との関わりを指摘しておられる。(4)そうした「臥病(疾)」詩のなかで、斉の王秀之「臥レ病叙レ意」(『謝宣城集』巻四)と斉の謝朓「和二王長史臥レ病」(同)などのように、病臥する側が先に作品を贈る贈答が存する事実は、「悲歌」贈答の次第を考える上で示唆的である。また次の詩題・詩序の「簡」の用法も参考になるだろう。

於二冬日晉光寺一、臥レ疾値レ雪、簡二諸旧遊一

(道宣撰『続高僧伝』巻三「隋釈慧浄」)

余臥レ疾閩海、弥留二旬朔一。……力疾粗陳二其意一、敬簡二法師一云爾。

(隋王胄「臥レ疾閩海、述二浄名意一并序」『広弘明集』巻三十下)

これらの「簡」の語は、「臥病(疾)」詩に書簡文を添えて贈った状況を示すものとして用いられており、「悲歌」贈答の形式もこれに同じい。

だとすれば、家持の歌と書簡文とでは、「臥病(疾)」に関わる

詩と書簡文との贈答が重なりあうような様相を呈しているといえる。まず池主から見舞いの内容を主とする書簡文が出され、家持は「悲歌」に添えた書簡文の前半でこれに応じ、「臥病(疾)」に際しての書簡贈答が書儀の類型と対応する。さらに家持は、「臥病(疾)」詩の主題を意識した「悲歌」を書簡文後半の対句との対応も含めて見舞いとともにもたらされたであろう三日遊覧の誘いに対する辞退を池主に伝えるための、十分な配慮をもって詠んでいるのである。「臥病」に関わる歌と書簡文との贈答の次第は、「悲歌」に答えた池主の短歌二首と添えられた書簡文でもって、そのすべてが揃うことになる。

「悲歌」と書簡文に答える池主は、「悲歌」の「春の花」を桜・山吹と具体化し、書簡文でも、「春花」を「紅桃」と受けて「翠柳」とあわせ、「春鶯」は「嬌鶯」と受けて、新たに「戯蝶」を取り込み、短歌に同じく景物の具体化に努めている。(5) 池主の念頭には、常套的な詩文の表現はもとより、次のような月儀(6)の対句表現に取り上げられた景物があったと考えられる。(7)

蜂歌遶二翠葉之歓一、蝶舞戯二紅芳之薬一。

(『書儀一巻』P.2505「二月仲春」)

方今遊蜂遶レ樹、戯蝶縈レ林。翠柳揺風、楊桃影爛。対二斯節一納一、歓逾何窮。

(同「三月季春」答書)

鶯囀二清枝一、蝶飛二黄葉一。

(『新集両親家接客随月時景儀一巻』P.2042v「四月孟夏漸熱」)

また二首の短歌は、家持が外界の景物にあこがれている心情を詠んだのに対して、「君に見せてば何をか思はむ」(三九六七)「君が手触れず花散らめやも」(三九六八)と丁寧に応じながら、そこに、家持の回復を願う気持ちを込めたものと解される。池主は、春の景色を具体化し、家持の病床での嘆きを慰撫する一方で、池主自身も「豈慮乎、蘭蕙隔レ襄、琴罇無レ用。空過二令節一、物色軽レ人乎」と、家持との遊覧が実現しないのを嘆く。さらにこの嘆きは「所レ怨有レ此、不レ能二黙已一」と強調されるのである。

ふたりの贈答は、病臥に関わる詩と書簡文の贈答類型からすれば、以上でもって終結するのが自然であったといえよう。しかしながら、家持はさらに池主の答歌から間をおかず、長短歌四首からなる「更贈歌一首并短歌」(三九六九〜三九七二)を、翌「三月三日」の日付で送り届ける。「所レ怨有レ此、不レ能二黙已一」と池主も述べるように、三日遊覧に参加がかなわなかった嘆きは、家持が遊覧の当日に送った「更贈歌」の内容と無縁ではなかろう。「臥病」と関わる「悲歌」と書簡文の贈答にとどまらず、さらに贈答を続けようとする家持の意識は、「更贈歌」と書簡文との関係から捉えてゆくことが、「悲歌」贈答から「更贈歌」への展開をあ

きらかにするためにも肝要と思われる。

二

更贈歌一首并短歌

含弘之徳、垂二思蓬体一、不貲之恩、報二慰陋心一。戴二荷来眷一、無レ堪レ所レ喩也。但以二稚時不レ渉二遊芸之庭一、横翰之藻、自乏二乎彫蟲一焉。幼年未レ逕二山柿之門一、裁歌之趣、詞失二乎聚林一矣。爰辱二以レ藤続レ錦之言一、更題二将レ石間レ瓊之詠一。固是俗愚懐レ癖、不レ能二黙已一。仍捧二数行一、式酬二嗤咲一。其詞曰、

大君の　任けのまにまに　しなざかる　越を治めに　出でて来し　ますら我すら　世の中の　常しなければ　うちなびき　床に臥い伏し　痛けくの　日に異に増せば　悲しけく　ここに思ひ出　いらなけく　そこに思ひ出　嘆くそら　安けなくに　思ふそら　苦しきものを　あしひきの　山き隔りて　玉桙の　道の遠けば　間使いも　遣るよしもなみ　思ほしき　言も通はず　たまきはる　命惜しけど　せむすべの　たどきを知らに　隠り居て　思ひ嘆かひ　慰むる　心はなしに　春花の　咲ける盛りに　思ふどち　手折りかざさず　春の野の　繁み飛び潜く　うぐひすの　声だに聞かず　娘子らが　春菜摘ますと　紅の　赤裳の裾の　春雨に　にほひひづちて　通ふらむ　時の盛りを　いたづらに　過ぐし遣りつれ　偲はせる　君が心を　愛しみ　この夜すがらに　眠も寝ずに　今日もしめらに　恋ひつつぞ居る　（三九六九）

あしひきの山桜花一目だに君とし見てば我恋ひめやも　（三九七〇）

山吹の繁み飛び潜くうぐひすの声を聞くらむ君はともしも　（三九七一）

出で立たむ力をなみと隠り居て君に恋ふるに心どもなし　（三九七二）

三月三日、大伴宿祢家持

家持が贈った長短歌四首は、病臥における詩と書簡文それぞれの贈答類型との対応からみて完結したと推察されることから、当初から構想されていたとは思われず、三日遊覧を前日にして届けられた池主の答歌と書簡文とが、制作の契機となったと考えられる。このように制作契機が接近する作品に存し、その上「悲歌」と較べて長短歌四首に書簡文を添えるという作品の規模が大きく拡大する。そうした作歌契機と作品が長短歌である点を考慮するならば、吉井巌氏「越中守家持の作品をめぐって」（『萬葉集への視角』所収）の詳細な分析によってあきらかなように、「悲歌」贈答

に先立つ「忽沈二枉疾一、殆臨二泉路一。仍作二歌詞一、以申二悲緒一一首并短歌」(17・三九六二～三九六四)との表現の類似が長歌に認められるのも首肯される。「申二悲緒一一首」は、題詞と左注に記されるように、病床での嘆息を詠んでおり、家持が先立つ長歌の表現を利用したであろうと解することに問題はなかろう。だが、ふたつの長歌は多くの類似表現を持ちながらも、あくまで都を志向する「申二悲緒一一首」に対して「更贈歌」は作品を受け取る池主を意識した表現に改められており、この点において、まず差異が際立つ。また、病臥の表現に留意するならば、長歌冒頭部で越中赴任を述べた後に「うちなびき　床に臥い伏し」と詠まれる。さらに、

痛けくの　日に異に増せば　悲しけく　ここに思ひ出　いらなけく　そこに思ひ出　嘆くそら　安けなくに　思ふそら　苦しきものを

のように、病に呻吟する姿を常套的な対句を重ねることによって描き出している。加えて「申二悲緒一一首」では結びの直前にある「たまきはる　命惜しけど　せむすべの　たどきをしらに」の四句を、「更贈歌」では前半の末尾に据えて、病み臥す姿を詠んで執拗に繰り返す。さらにこの四句は「かくしてや　あらしをすらに　嘆き臥せらむ」に続いて結ぶ「申二悲緒一一首」とは異なり、「隠り居て　思ひ嘆かひ」と病臥して籠もり嘆く姿[8]を描写する表現へと展開する。「隠り居」は、短歌第三首でも「出で立たむ力を無みと隠り居て」と詠まれており、「春花の散りのまがひに死ぬべきおもへば」(三九六三)と死をも想起させる「申二悲緒一一首」とは、内容が異なると認めなくてはならない。

二首の長歌は内容のみならず構成においても相違が認められる。「申二悲緒一一首」は病臥の嘆きを随所に詠み込むのに対して、「更贈歌」では病臥の苦しみを前半にまとめてその末尾を「隠り居」の嘆きでもって結び、後半は春の景物描写から池主の慕情へと展開するのである。

家持は、はじめての越中の春を病床で過ごさざるをえない「隠り居」の心情を、「悲歌」において、願望表現を用いて慨嘆した。その家持に対して池主は懇切丁寧な答歌と返簡をしたため慰撫する。そうした池主に寄せる思いを、家持は「偲はせる　君が心を愛しみ　この夜すがらに　眠も寝ずに　今日もしめらに　恋ひつつぞ居る」と結びで詠む。春への憧憬を募らせながら「いたづらに　過ぐし遣りつれ」と愛でられない嘆きを述べるものの、池主の心を込めた対応で、「隠り居」によって生じていたであろう家持の鬱屈した心情は、解消されつつあったのではあるまいか。そうした家持を思いやり、回復を願う池主に、家持の心情がおのずと向けられた結果が長歌の結びと解するのが穏当であろう。

前後二段からなる長歌は、前半部の病臥を嘆く表現が二十九日の書簡文の表現（「身体疼羸、筋力怯軟」「不レ耐二策レ杖之労一」）を想起させ、後半部での「春」の語を繰り返す表現に留意するならば、同じ書簡文での「春」の同語反復表現との類似が認められる。だとすれば、長歌の表現は、二十九日の書簡文を骨子にしたといえるであろう。結びの池主への慕情も、書簡文の前半末尾に対応する表現と捉えうる。「更贈歌」は、「悲歌」が短歌の表現を書簡文の対句に取り込む関係と異なり、先の書簡文で伝えようとした内容を表現したといえよう。このような内容と構成の長歌を送ったのには、池主が返簡で二首の短歌を「倭詩」と表現した点に求められるだろう。家持は「更贈歌」に附した書簡文起筆で「悲歌」に答えてくれたことに対する感謝の念を示すが、その際、池主が書簡で「悲歌」を「倭詩」と表現していたのを見逃さなかったはずである。池主の好意に対して家持は「戴二荷来貺一、無レ堪レ所レ喩也」と述べ、さらに「俗愚」とみずからを卑下し、かつ歌文にわたって非才であると記すのである。だが「更贈歌」は緊密な構成意識に支えられた作品と認められる。こうした長歌と書簡文との関係は、書簡文の中で歌文の創作に対する謙辞を述べた部分までに異文はなく、整然とした対句であることが考慮されてよいだろう。それだけに、書簡文での謙辞が実際には家持の自負の裏返しと解しうるのであって、「更贈歌」からは、家持の歌作に対する自信が看て取れるのである。

「更贈歌」にあわされた短歌三首は、「悲歌」贈答と対応する第一・第二首のみにとどまらず、長歌の結びに応じた第三首を詠み添えることによって全体の構成が整えられていると捉えるべきである。第一・第二短歌では、池主の答歌に応じつつ「君とし見てば我れ恋ひめやも」と池主とともに山桜を賞美することを望み、そこへ池主に対する思慕を重ね合わせ、また「君は羨しも」と鶯を賞美しているであろう池主への羨望をあらわにする。二首はいずれも池主に対する心情に集約してゆくという共通した構成を取る。また、長歌の結びと対応する第三短歌では、「出で立たむ力をなみと隠り居て」と病床の姿をふたたび示し、鬱情を晴らす手だてがなく閉塞した状態を上三句で詠む。その如何ともしがたい心情を慰撫したのは、下三句を「君に恋ふるに心どもなし」と結ぶ家持の姿勢からあきらかなように、池主の存在であったといえる。「悲歌」贈答に先立つ池主の書簡に触れられていたであろう三日遊覧と、「悲歌」での病臥の嘆きとを、おもに後者に重点を置いて「更贈歌」を作品化しながらも、家持は池主に対する慕情を長歌の結びと第三短歌に収斂させている。「更贈歌」がこのような構成を取るのは、歌作の契機が池主の答歌と返簡にあるから

なのであろう。

「悲歌」贈答のなかで、池主の心を込めた対応に家持の病臥の嘆きは癒されたと思われる。その贈答から、即座に家持が「更贈歌」を贈ったのは、「悲歌」に対する池主の答歌が「沽洗(三月)二日」であり、翌日がかねてから誘いのあった遊覧の日にあたっていたためだといえる。それゆえ家持がみずからを「隠り居」と表現した作品を「三日」の日付で送り届けたことに意味が存すると捉えなくてはならない。

「悲歌」から「更贈歌」への展開のなかで、歌と書簡文との交渉を求めようとする姿勢の認められないことが、相違のひとつとしてあげられる。そうした歌文の関係は、「悲歌」に対する池主の作品と同様である。つまり、「更贈歌」は歌が病臥の嘆きから池主への慕情へと集約し、書簡が池主の「倭詩」に触発されるかのように、倭歌に対する思いを示すという構成をなす。歌に書簡文を添える「悲歌」と同じ形式を取りながらも、相互の表現の交渉は希薄であり、書簡文の表現も書儀との関係は起筆に認められるにとどまる。だとすれば、家持は歌文の融合による作品の形成から、歌文は独立的でありながらも、倭歌に対する意志をそれぞれで表現することによって関係を持たせようとしているのであろう。

「更贈歌」における「隠り居」の嘆きと配慮ある池主への慕情とは、以後の作品のなかで複線化して展開してゆく。まず「隠り居」を嘆く家持に対して、池主は、五日の長短歌三首(三九七三～三九七五)で里人の言葉を引用しながら、「をとめらは　思ひ乱れて　君待つと　うら恋すなり」(三九七三)と乙女たちが家持の訪れを待ちこがれていると春の野に誘い、池主自身も長歌の結びで「心ぐし　いざ見に行かな　ことはたなゆひ」と、さらなる遊覧に家持を誘う。家持が三月三日に、みずからをなお「隠り居」にあると嘆く態度に池主は理解を示しながら、「悲歌」贈答での態度を繰り返して新たな遊覧に家持を導く。また二首の短歌では、家持に対する思いの深さを「愛(うるは)しと我が思ふ君はしくしく思ほゆ」(第一首)と示し、第二首も同じく、会うことすらかなわない状況を「葦垣の外に嘆かふ我し悲しも」と池主自身の嘆きとして詠んでいる。家持が池主への慕情をあらわに表現したのを、池主は二首の短歌でみずからの慕情を表現し、長歌では遊覧への誘いを中心に詠む。長歌がこのような内容になったのは、「悲歌」贈答での三日遊覧の内容から、新たな遊覧へ導くことに重点を置いたからだと理解できる。

そうした遊覧への誘いの変化は、結果的に池主が立て続けに送ることになる三日遊覧を主題とした「七言晩春三日遊覧一首并

序」(三月四日)と「更贈歌」に対する答歌(三月五日)での表現の相違にあらわれているといえる。かたや池主の七言詩に対して家持は、和の作品にあたる「七言一首」を送る。その際に「短歌二首」を詠み、ふたつの作品を並記した家持の意図は那辺にあるのか。のみならず、「更贈歌」と「七言一首」「短歌二首」の書簡文後半に存する長大な異文[9]は、一連の贈答の形成とも関わり、書簡文本文との検討にとどまらず、歌とのあり方もあきらかにされなくてはならない。なかでも、最後の作品である「短歌二首」は、本文と異文によってその位置付けに差異が認められる。

三

「更贈歌」に答える池主の長短歌三首(三九七三〜三九七五)は、三月五日に家持のもとに届けられたと覚しい。その間に池主は「七言晩春三日遊覧一首并序」を贈り、贈答は錯綜する。そうした贈答の次第は、それぞれの書簡文起筆によって知られる。池主が長短歌三首に添えている書簡文の起筆は「昨日述㆓短懐㆒、今朝汙㆓耳目㆒」のように、池主の七言詩(「述㆓短懐㆒」)と「更贈歌」の答歌(「汙㆓耳目㆒」)とを、それぞれ四日・五日に送ったことをあきらかにする。対する五日の日付を有する家持の書簡文起筆では「昨暮……垂㆓晩春遊覧之詩㆒」「今朝……貺㆓相招望野之歌㆒」のごとく応じる。池主が「更贈歌」以降に送り届けるふたつの作品のうち、「七言晩春三日遊覧一首并序」には三日遊覧のさまが七言八句にまとめられ、この詩序では「嗟乎、今日所㆑恨、徳星已少歟」と家持を「徳星」のごとき優れた人物と表現し、その不在を憾む内容が認められる。同様な記述は、「悲歌」贈答での池主の書簡(豈慮乎、蘭蕙隔㆑藂、琴罇無㆑用。空過㆓令節㆒、物色軽㆑人乎)にもすでにみられ、彼の嘆きは、三日遊覧を描く七言詩の序文で、より明確化されたといえる。さらに、池主からの見舞いの書簡文以来、ふたりが言及しつづける三日の遊覧については、池主の詩序のみならず、家持自身が「雖㆑欲㆓追㆒尋良此宴㆒、還知染㆑懊脚跉趵」(「七言一首」第七・八句)のように、なお身体的理由をもって参加のかなわなかったことを嘆息しているのである。そうした家持の態度は、「悲歌」に添えられた書簡文後半の表現に類似し、一連の贈答を通して一貫していると看て取れる。ただし、錯綜する詩と歌の贈答において、池主の「七言晩春三日遊覧一首并序」には、先立つ「更贈歌」との交渉は認められず、詩と歌は異なる意識のもとで創作されたと捉えるべきであろう。

家持が池主から誘われた三日の遊覧にかくも執着するのは、配慮ある池主の態度もさることながら、家持にとって、はじめて迎える越中の春であったことが、要因のひとつと考えられる。それ

ゆえ、家持の嘆きは「悲歌」贈答から池主に導かれての七言詩贈答にまで貫かれる。そうして病床で呻吟する嘆きを三日の遊覧と関連させつつ、詩と歌の贈答は展開をみせるのであろう。また錯綜する贈答のなかで、「隠り居」の嘆きと池主に対する思慕の情を深める「更贈歌」は、末尾注記に「三月三日」と記すことで、一連の作品との関連が存すると考えられる。しかしながら、家持の嘆きを主題に据えるのではなく、池主への思慕の情に集約しようとする意図が「更贈歌」の構成から窺え、一連の贈答でありながらも、その相違は小さくないように思われる。

集中的なふたりの贈答は、家持が「七言一首」と「短歌二首」とを送り届けることをもって終結する。

昨暮来使、幸也以垂二晩春遊覧之詩一、今朝累信、辱也以貶二相招望野之歌一。一看二玉藻一、稍写二鬱結一、二吟二秀句一、已蠲二愁緒一。非二此眺翫一、孰能暢レ心乎。但惟下僕、稟性難レ彫、闇神靡レ瑩。握レ翰腐レ毫、対レ研忘レ渇、終日目流、綴レ之不レ能。所謂文章天骨、習レ之不レ得也。豈堪二探レ字勒レ韻、叶二和雅篇一哉。抑聞二鄙里小児一、古人言無レ不レ酬。聊裁二拙詠一、敬擬二解咲一焉。如今賦レ言勒レ韻、同二斯雅作之篇一。豈殊二将レ石間レ瓊、唱レ声遊二走曲一歟。抑少児譬二濫謌一。敬写二葉端一、式擬レ乱曰、

七言一首

杪春余日媚景麗、　初巳和風払自塵。
来燕銜レ泥賀宇入、　帰鴻引レ蘆迴赴レ瀛。
聞君嘯レ侶新二流曲一、　禊飲催レ爵泛二河清一。
雖レ欲二追尋一良此宴一、　還知染レ懐脚跡町。

短歌二首

咲けりとも知らずしあらば黙(もだ)もあらむこの山吹を見せつつもとな　（三九七六）

葦垣の外(ほか)にも君が寄り立たし恋けれこそば夢に見えけれ　（三九七七）

三月五日、大伴宿祢家持臥レ病作之

家持は、詩と歌を送ったにもかかわらず、書簡文では七言詩に対する言及が多くを占め、「短歌二首」にふれる部分はないといってよい。七言詩の贈答は、一連の贈答で立場が唯一逆転するがゆえに、記述が七言詩中心になるのも当然といえる。たとえば、末尾の「抑聞二鄙里少児一、古人言無レ不レ酬。聊裁二拙詠一、敬擬二解咲一焉」は、直前の「豈堪二探レ字勒レ韻、叶二和雅篇一哉」から推して、「七言一首」に対する文言であることは動くまい。このように書簡文本文からは、「短歌二首」の位置付けがあきらかにされているとは言い難い。ただし、元暦校本萬葉集には残らないが、書簡文末尾に存する小字双行注は「豈堪二探レ字勒レ韻、叶二和雅篇

二九

二哉。……敬擬二解咲一焉」の異文と考えられ、結びが現行本文と大きく異なり「式擬レ乱曰」と作ることは留意されなくてはならない。「擬レ乱」の「乱」は、本来、辞賦のまとめとして置かれる作品を意味する語として用いられる。双行注末尾の形式からすれば、「乱」は詩と歌の双方を指すとも解されるが、「七言一首」は、あくまで池主の七言詩に対する和の作品であることから、この詩を含めては解しえない。だとすれば、「更贈歌」に和した池主の長短歌に対して「短歌二首」を「乱」と位置付け、さらには一連の贈答の収束をも示すのが双行注の末尾表現であると捉えるのが穏やかであろう。(10) 以上のように双行注の「乱」の解釈を通して「短歌二首」の位置付けは可能性を有するものの、書簡文本文が「短歌二首」にふれていない理由は、文末表現を手がかりに考えるべきではなかろうか。

本文末尾と双行注末尾との相違は、前者が「聊裁二拙詠一、敬擬二解咲一焉」と終止するのに対して、後者は「敬写二葉端一、式擬レ乱曰」のごとく、「曰」を用いて詩と歌に連続する点にある。同様に書簡文末尾に異文をもつ「更贈歌」は、本文と異文共に「曰」で歌と連続させ、五日の書簡文本文と双行注とに認められる関係とは異なる様相を呈している。また書簡文末尾に異文が存しない「悲歌」でも「其詞曰」と歌に直接しており、書簡文本文が歌と連続しないのは、家持の意図したところであったと推察される。

一連の贈答のなかで、五日の本文末尾と同じく「曰」を用いずに書簡文を終止させるのは、「悲歌」に対する池主の答歌に添えられた書簡文(聊擬二談咲一耳)に限られ、しかも表現が類似性を有することも見逃せない。「悲歌」に対する池主の作品は、「悲歌」と書簡文のそれぞれに応じており、それゆえに池主は答歌と書簡文とを連続させずに終止させたのであろう。したがって、性格の異なる作品を並記することから、家持がそれぞれの作品に込めた主意を明確にするために、詩と歌を書簡文と連続させずに、文末を結んでいると解しうるのではあるまいか。本文とは対照的に、双行注は、一連の贈答を終結させようとする家持の意識を示しているといえよう。

「短歌二首」は、第一首が池主の「山吹は日に日に咲きぬ」(三九七四)に対して、「咲けりとも知らずしあらば黙もあらむこの山吹を見せつつもとな」と盛りに咲く山吹を詠み贈る池主に恨み言を述べる態度で応じ、第二首が池主の「葦垣の外に嘆かふ我(あ)れしかなしも」(三九七五)と直接に会うことのかなわない嘆きを受けて、「葦垣の外にも君が寄り立たし」と池主がすぐ側までやって来てくれているという、その心遣いを素直に受け取り、その上、夢にまで池主が現れてきたことを詠んで思慕の深まりを示して結

ぶ。つまり、この二首は、池主の短歌にのみ答えており、詩と歌を贈る際に附された書簡文で「相招望野之歌」と述べる長歌、とりわけ末尾で新たな遊覧へ誘う表現とは関連を有していない。池主が長歌末尾を遊覧の誘いで結んだのは、家持の「隠り居」の嘆きを解消しようとするためであり、三日の遊覧との直接的なつながりは、すでに存しないと解さなくてはならない。三日を期しての遊覧はかなわなかったけれども、池主が家持を思いやる気持ちを遊覧に誘う態度として長歌に詠んだといえよう。

また第一首が「悲歌」贈答から一貫して詠み継がれてきた「山吹」を取り上げ、第二首が「更贈歌」贈答での心遣いに返礼して慕情の深まりを示すという構成が認められる。とすれば、双行注に見られる「乱」を手がかりにして一連の贈答における「短歌二首」の位置付けが明らかになるのみならず、「悲歌」贈答での「臥病(疾)」の主題を意識した贈答との関わり、さらには「更贈歌」贈答との関わりまでもが、「短歌二首」は担わされていると考えられるのである。なお「七言一首」は、池主の七言詩に和す作品でありながら、「還知染レ懊脚跲趼」(第八句)が末尾注記の「臥レ病作之」と相俟って、同日で先行してもたらされた池主の長歌を「相招望野之歌」と称しながらも、思うにまかせない状態を池主に想起させる内容と理解できる。

家持は詩と歌によって、「悲歌」贈答にはじまる贈答を終結させた。現行の書簡文では、「短歌二首」にふれるところがなく、その位置付けが明確ではないけれども、この二首は一連の贈答全体に対して緊密な関連を有すると把握される。

四

家持の詩と歌と書簡文との関わりを、末尾注記の記述(臥レ病作之)をも視野に収めて、以上のように捉えるにしても、三日と五日の書簡文末尾に存する長大な異文と本文との関係が、なおあきらかではない。本文と異文の表現が日を隔てて錯綜することも両者の関係を複雑にしているひとつの要因といえよう。異文は、いずれも書簡文末尾に対するものであり、異文に較べて本文が整えられた表現と考えられるものの、錯綜のありようを詳細に検討し、作品形成の上で、このような交錯が生じた由を探る必要がある。それはまた、贈答作品相互の関係を明確にし、家持がいかなる意識で一連の贈答作品群を形成しようとしたのかを示すことになるはずである。

まず、「更贈歌」の書簡文末尾の本文と異文との関係は、次の通りである。

爰辱二以レ藤続レ錦之言一、更題二将レ石間レ瓊之詠一。固是俗愚懐レ

癖、不レ能二黙已一。仍捧二数行一、式酬二嗤咲一。其詞曰、

（本文「西本願寺本萬葉集」）

忽見二以レ藤続レ錦之文一、追慙二庸浅之作一。然惟古人无二言不レ酬。今者之意、孰能非レ報乎哉。因以述レ懐賦レ題、煩重敬和。其歌曰、

（異文「検天治萬葉集」による）

類似の表現は、冒頭の波線部分に存する。本文と異文ともに「悲歌」贈答での池主の書簡文（以レ藤続レ錦）を引用しながらも、対句に整えられた本文と異なり、異文では対句に対する配慮が認められず、引用部分との均整は崩れている。つづく傍線部分は、内容的に対応を有すると考えられる。本文には四字句への整理を志向して心情を的確に表現しようとする家持の意識が窺えるのに対して、異文では「古人无二言不レ酬」と『毛詩』（大雅・抑）に基づく言葉を用いて、「悲歌」に対する池主の答歌に家持は答えなくてはならないという強い姿勢が窺える。さらに異文では「今者之意、孰能非レ報乎哉」と反語を用いて直前の内容を繰り返し強調していると捉えられよう。そうした「悲歌」に対する池主の答歌に和そうとする家持の意識は、異文末尾の二重傍線部の「煩重敬和」に顕著に認められる。しかしながら「更贈歌」では、異文によって表現しようとする心情とは異なり、ひとり「隠り居」らねばならない嘆きと池主に対する思慕の情を示すことに主題がある。本文と異文の相違は、かような長歌の表現とも無縁ではない。つまり、異文から整然とした対句や四字句への書き換えは、「悲歌」での歌と書簡文表現の交渉をめざす創作意識から、「更贈歌」での「隠り居」の嘆きと池主への思慕の深まりを述べ、書簡文との関係をも考慮するならば、倭歌に対する家持自身の創作意識があらわれていると把握しうるのである。また「更贈歌」と題する作品が長歌である点にも家持の意識の一端が窺われるのではなかろうか。

異文では池主の答歌に和す態度が強く認められるのと異なり、書簡文本文ではあくまで家持自身の思いを的確に表現し、書簡文全体の主張を明確に示しているのである。したがって、すでに諸先学[1]が、本文と異文の間に重複する表現が多い状況から推定してきたように、本来異文は初案として作成され、それを基に改稿したのが現行本文であると、以上の考察から裏付けられる。

かたや、五日の本文と双行注の関係は、三日のそれとは様相を異にする。

豈堪二探レ字勒レ韻、叶二和雅篇一哉。抑聞二鄙里少児一、古人言無レ不レ酬。聊裁二拙詠一、敬擬二解咲一焉。

（本文）

如今賦レ言勒レ韻、同二斯雅作之篇一。豈殊二将石間レ瓊、唱レ声遊二走曲一歟。抑小児譬二濫謡一。敬写二葉端一、式擬レ乱曰、

（双行注）

冒頭の破線部分は、文字の異同が認められるけれども、「七言一首」をもって池主の七言詩に和す旨を述べていると捉えて大過あるまい。ただし、本文と双行注の表現で無視できないのは、破線部分の直前で詩作の才能は天性のものであると明言した「所謂文章天骨、習レ之不レ得也」との関わりである。本文ではこの文言を受けて、池主の七言詩にかなう作品が自分には作れないとことわりながらも、贈られた作品には必ず答えるべきであるという考えを、三日の異文に見られる『毛詩』を引用し、池主の七言詩に対して「七言一首」を和の作品とする理由付けをおこなう。対する双行注では、詩才についての言及とは関わらず、池主の七言詩に和す態度を波線部分で述べて「豈殊二将レ石間レ瓊、唱レ声遊二走曲一歟。抑小児譬二濫謡一」とみずからの七言詩は、たわいのないものと卑下する。双行注は、この部分で先の詩才を述べる内容と関わりを持つ。つまり、双行注は、あくまでも池主の七言詩に和すことを第一に意図した表現と解されるのである。また、作品の質については、その後に言い添えているのに較べて、本文では池主の七言詩からすれば稚拙で十分な答えになりえているとは言い難いけれども、一連の贈答で唯一立場が逆転しているがゆえに、「七言一首」を和の作品として送るという論理的な展開で書簡文を書き進めたと解釈できよう。それゆえ、本文と双行注とを書簡文全体の内容との関わりでみたばあい、本文が池主に対して配慮ある内容になっていると判断できる。

五日の本文と双行注は、書簡文の文末に至ってさらに大きな相違を見せ、本文が三日の異文に対応（――部分）し、双行注は三日の本文との対応（～～部分）が認められ、日を隔てた本文と異文の交錯が生じている。本文末尾の後半部分と双行注とは、「少（小）児」の語がかつがつ共通するにすぎず、三日の本文と異文とに指摘できるような類似表現は認められない。だとすれば、三日の本文と異文、五日の本文と双行注のそれぞれの関係は異質であると理解すべきなのであろう。

以上のように、三日と五日の書簡文末尾に認められる書簡文本文と異文・双行注の検討からは、いずれも池主の作品と家持自身の作品とをいかに位置付けるかを述べる点が共通すると解しうるのであり、一方両者の相違は、一連の贈答における家持の歌に対する意識が存するか否かといえるのではなかろうか。「更贈歌」において家持は、「悲歌」贈答と三日遊覧とを意識する態度から、池主に対する慕情へと歌を収斂させる。そうした歌の構成は、書簡文末尾の異文を書き替えていく過程で、作品全体を通して倭歌に対する家持の姿勢を示していると思われる。これと連動するか

のごとく、短歌での贈答ではなく「更贈歌」は長短歌からなる作品になっていることからして、書簡文の本文末尾はあらたに歌を送る意志をあきらかにしたといえる。

とすれば、五日の本文と双行注の関係は、次のように整理することができる。双行注の内容では、家持自身の創作意図を十分に示しえないと判断して、「七言一首」のみに言及した書簡文後半の本文を別途に作成したのではなかろうか。その際、三日の異文(初案)から推敲を経て書簡文本文ができあがっているのであるから、池主の七言詩に対して「七言一首」を和の立場で作成している家持は、異文(初案)の「古人无二言不一レ酬」がみずからの状況に適しているため、五日の本文に取り込み利用していると推察される。つまり、本文と双行注とは三日の本文と異文(初案)のごとき推敲関係にあるのではなく、双行注は本文に対する別案と称しうる関係と理解すべきである。また、双行注(別案)と三日の本文との類似表現(～～～部分)は、双行注があくまで別案となったことから、池主の謙辞「以レ藤続レ錦」との対句を整えるために、三日の異文(初案)から本文への推敲に際して双行注(別案)が参照されたのであろう。

異文と双行注とを、それぞれ初案・別案と分けて解するにしても、双行注のみが、多くの古写本で本文に附随して残るのは、「短歌二首」の捉え方と関わる。つまり、別案を双行注として意図的に記しとどめることにより、家持は「短歌二首」を一連の贈答のなかでどのように位置付けうるのかを示そうとしたのではなかろうか。以上のような把握は、現存の古写本の書写状況からも裏付けられる。具体的には、三日の異文が検天治萬葉集など少数の古写本にのみ残るのに対して、五日の双行注が元暦校本萬葉集には欠くけれども、その他の古写本に残るという状況にある。

「悲歌」贈答からはじまる一連の贈答は、家持の書簡文の異文(初案・別案)をも含み込み、全体が緊密な関連を有する作品群をなす。贈答の進展にしたがって主題を展開させながらも、その端緒は「臥病(疾)」を意識した作品であるという認識が、五日の作品にも認められ、最後まで家持に存したと思われる。そのような一連の贈答の最後に位置する詩と歌の末尾注記には、これまでと同様に作者名と日付を記すのみならず、「臥レ病作之」という記述に特色が認められる。この末尾注記に関わり看過しえないのは、注記が「悲歌二首」に附されている書簡文の表現と対応するにとどまらず、贈答に先立つ「申二悲緒一一首」(三九六二～三九六四)の左注にも「臥レ病悲傷」と同様な記述が存する点である。だとすれば、家持が附した末尾注記は、単に「臥レ病」という状態を示すにとどまらず、一連の贈答と直前に位置する作品との関係を想

起せしめる注記と捉えうるのである。詩をも含めた贈答の最後の作品に至ってなお「臥レ病」と記す家持の意識を、先立つ「申二悲緒一一首」と一連の贈答作品との関わりを通して、あきらかにしなくてはならない。ふたつの作品の関わりは、吉井巖氏先掲論文によってあきらかにされたけれども、題詞・左注のありようからは、なお黙視できない点が存する。

五

忽沈二枉疾一、殆臨二泉路一。仍作二歌詞一、以申二悲緒一一首
并短歌

大君の　任けのまにまに　ますらをの　心振り起し　あしひきの　山坂越えて　天離る　鄙に降り来　息だにも　いまだ休めず　年月も　幾らもあらぬに　うつせみの　世の人なれば　うちなびき　床に臥い伏し　痛けくし　日に異に増さるたらちねの　母の命の　大船の　ゆくらゆくらに　下恋にいつかも来むと　待たすらむ　心さぶしく　はしきよし　妻の命も　明け来れば　門に寄り立ち　衣手を　折り返しつつ夕されば　床打ち払ひ　ぬばたまの　黒髪敷きて　いつしかと　嘆かすらむぞ　妹も兄も　若き子どもは　をちこちに騒ぎ泣くらむ　玉桙の　道をた遠み　間使ひも　遣るよしもなし　思ほしき　言伝て遣らず　恋ふるにし　心は燃えぬたまきはる　命惜しけど　せむすべの　たどきを知らに　かくしてや　荒し男すらに　嘆き伏せらむ　（三九六二）
世の中は数なきものか春花の散りのまがひに死ぬべき思へば　（三九六三）
山川のそきへを遠みはしきよし妹を相見ずかくや嘆かむ　（三九六四）

右、天平十九年春二月廿日、越中国守之舘臥レ病悲傷、聊作二此歌一。

家持が三月五日の末尾注記に記す「臥レ病」と同じ語が左注に附されているこの長短歌は、まず作者名を明示していないという点で特異性が際立つ。作者については、左注の「越中国守之舘」から推して家持と考えられるけれども、居所によって作者を明示する例は少なく、巻十七では、次に示す作品に限られる。

守大伴宿祢家持舘飲宴一首　四月二十六日

都辺に立つ日近付く飽くまでに相見てゆかな恋ふる日多けむ　（三九九九）

この宴席歌は、直前の作品（三九九五～三九九八）の題詞「四月二十六日、掾大伴宿祢池主之舘、餞二税帳使大伴宿祢家持一宴歌并古歌四首」を前提にしなくては十分な理解がえられない。この作品

は、正税帳使として上京する家持を餞する宴席歌であり、家持の館での詠作も、池主の館から場所を移してのものと理解できる。「都辺に立つ日近付く」の表現から、作者は家持とみうる。だとすれば、題詞の「守大伴宿祢家持舘」は、宴席の場と同時に作者をも示すことになる。

また、「申二悲緒一一首」の題詞冒頭「忽沈二枉疾一、殆臨二泉路一」については、吉井巖氏が「悲歌二首」の書簡文起筆「忽沈二枉疾一、累旬痛苦」との関わりを指摘し、表現の展開をあきらかにしておられる。このような題詞冒頭と類似する表現を萬葉集に求めるならば、

惟以二天平七年乙亥一、忽沈二運病一、既趣二泉界一。
（3・四六〇、四六一左注）

帥大伴卿忽生二瘡脚一、疾苦枕席。（4・五六六、五六七左注）

於レ是娘子、感慟悽愴、沈臥疾疚。（16・三八〇四題詞）

などがあげられる。いずれも左注あるいは左注的題詞[12]と称される例であり、題としての性格は希薄であると判断される。さらにこの題詞が内包する問題は、詩題と比較したばあい、一層あきらかになる。現存する詩題のなかで冒頭部分に「忽」を冠する例は、初唐まで降っても、

忽不レ任レ愁、聊示二固遠一詩（梁王僧孺、『芸文類聚』人部「愁」）

忽見二檳榔一
（北周庾信『庾開府集』巻四。ただし『芸文類聚』菓部「檳榔」では「詠二檳榔一詩」に作る）

忽夢二遊仙一（初唐王勃『王子安集』巻三）

の三例にすぎない。このように、冒頭の表現形式からも題詞の書き出しは、題としての一般性を持ちえていない。

加えてこの題詞末尾には「歌」の語を用いておらず、「一首」を除くと全体を四字句で整えようとする意識が強く看て取れるのである。同様な形式の題詞として先立つ例には、

橙橘初咲、霍公鳥翩嚶。対二此時候一、詎不レ暢レ志。因作二三首短歌一、以散二鬱結之緒一耳。（17・三九一一〜三九一三　家持）

があげられる。家持の弟書持が久邇京の兄のもとに「詠二霍公鳥一歌二首」（三九〇九、三九一〇）を贈り、これに答えた家持が歌に附した文章である。左注は「従二久邇京一報二送弟書持一」とあることから、この文章は、短歌三首に対する題詞というよりも、実際の贈答では書簡文（尺牘）として機能していたと推察される。また当面の贈答後にも、家持と池主の作品には類似の例が存する。

入レ京漸近、悲情難レ撥、述レ懐一首并一絶（17・四〇〇六、四〇〇七　家持）

忽見二入レ京述レ懐之作一。生別悲兮、断腸萬廻、怨緒難レ禁。聊

奉二所心一一首并二絶　（四〇八～四〇一〇　池主）

いずれも「歌」の語を用いておらず、四字句を中心とした表現に整えられている。特に留意すべき表現は、池主の題詞の「見二入レ京述レ懐之作一」と「奉二所心一」である。このような題詞の表現は、冒頭に「忽」を冠する類似の表現が返簡に見出しうることと関わらせて理解すべきなのではあるまいか。

忽得二来問一、深以慰レ懐。

（杜友晉『書儀鏡』P.329「書儀題目不明」答書）

忽枉二刀札一、叙二復面一焉。

（杜友晉『書儀鏡』P.361「与二親家翁一書」答書）

書儀に見られる表現との接近は、題詞の記述内容も考慮するならば、贈答に際して歌に附された書簡文の表現を取り込みながら池主の題詞が作られているとの理解を導くといえよう。先掲の書持への答歌に附された前文（尺牘）とは表現が異なるものの、書簡文の表現を題詞に取り込んでいると解して問題はあるまい。

ならば、吉井巖氏が先掲論文で図示されたような、先立つ「申二悲緒一一首」の題詞から「悲歌二首」の書簡文への表現の展開は、すでに題詞の表現に書簡文が有する表現の特性が備わっていると捉えることで整合性をもつ。「申二悲緒一一首」の題詞と「悲歌二首」の書簡文起筆との類似性は、このような観点から把握するべきなのである。

以上のような題詞の特異性は、左注の記述との対比によってさらに顕在化する。題詞と左注の内容を比較したばあい、題詞冒頭「忽沈二枉疾一、殆臨二泉路一」は、左注の「臥レ病」にほぼ相当し、また「仍作二歌詞一、以申二悲緒一」と左注の「悲傷、聊作二此歌一」にも同様な傾向が看て取れる。一方、作歌年月日と作者名は、左注にのみ存し、題詞内容との関係は認められない。つまり、左注の年月日と作者名を記す前半には題詞との重複が認められず、後半は題詞と内容的に重複し、題詞は左注後半の内容を敷衍して四字句に整えたかのごとき関係をなすのである。題詞と左注とは作品に対して相補的な関係にあるのではなく、左注の記述内容で作歌事情は充足されていると判断できる。このような関係と、題詞が書簡文起筆と類似性を有し、題詞として特異な形式にある点とを考えあわせるならば、「申二悲緒一一首」は左注のみが附された状態で当初存した可能性があるであろう。しかも、この作品が家持にとって最初の独詠長歌[13]と位置付けうる状況は、作者名を明記しない点とあわせて、作品の有する問題があくまで家持個人の側に属するといえよう。

また長歌の末尾表現が「更贈歌」と関わる点をも含めて考えるならば、「申二悲緒一一首」は「悲歌二首」にはじまる一連の贈答

と深い結びつきを持つと認められる。さらに池主との贈答では、本来題詞は附されておらず、末尾注記のみが存し、その後家持の作品に題詞が附されたと覚しい。同様に先立つ独詠長歌も、まず左注が附され、後に左注を基にした題詞が記されたと捉えられるのである。つまり、家持の独詠長歌と池主との贈答作品とは相互に影響をあたえつつ、最終的には同様の形成過程を経ていると理解できる。

成立契機を異にするふたつの作品は、「臥レ病」の語を左注に記すことによって、関連を有する作品群をなすといえる。両者に共通する「臥レ病」の語は、池主との贈答では贈答を収束させる家持の詩と歌の末尾注記に記され、これによって「悲歌」贈答を、さらには同じく「臥レ病」を左注に記す独詠長歌をも想起させ、「臥病」作品群全体の統一を意識的にはかろうとする家持にとって、重要な意味を担う表現であると考えられる。それだけに三月五日の「臥レ病作之」という末尾注記は、これまでの注記とは異なる位置付けがなされなくてはならない。かつふたつの「臥病」作品を考える上で、これらの作品形成が意識的であることを、「臥レ病」の語が端的に示しているのである。

歌を贈答する際に附された書簡文を含めた作品としては、家持の父大伴旅人の「大宰帥大伴卿報二凶問一歌一首」(5・七九三)が先蹤としてある。家持は旅人の作品での歌と書簡文との関係をより緊密化させ、歌文を有機的に対応させようと試みたのが「悲歌」だといえる。これを端緒とする池主との集中的な贈答は、詩文の表現とその関わらせ方に対する認識を新たにすると同時に、歌への強い自覚を促す契機となった。

「悲歌」贈答にはじまるふたりの応酬は、先立つ独詠長歌をも含みながら「臥病」作品群を形成している。これらの作品からは、歌と書簡文の有機的な対応を積極的にはかろうとする家持の意識が窺える。そうした家持の意識は、独詠長歌に先立つ「相歓歌二首」(三九六一、三九六二)に早くも認められる。宴席歌でありながら家持の詠作のみで構成された二首の短歌は、主賓の池主を第一の理解者として家持は想定していたと思われる。また二首の短歌と左注との関係には、中国詩論との接点が指摘できるという(14)。

池主との関わりをめぐって展開するこれらの作品は、歌と詩文との距離を様々にはかりながら、家持にとっての歌のありようを新たに位置付ける試みであるかに思われる。これ以後、天平十九年春の贈答が家持の歌作に大きな影響を及ぼしていくのは、この贈答が、歌と詩文との関係をいかに捉えるべきかを見定めようとする契機となったからなのであろう。家持の意図としては、「臥レ病」の語を一連の作品に対する枠組みとして規定し、詩的な文

学主題を持続させていると考えられる。贈答の最後に殊更「臥レ病」と注記したのは、先立つ「申二悲緒一二首」の左注に「臥レ病悲傷」と書き記したことと相俟って、「臥病」作品群としての意味をあきらかにせんがためと理解できる。

一連の作品を通して家持が獲得した歌に対する意識は、これ以後、多様化して顕現してくる。ゆえに、池主との贈答作品が有する意義は大きいといわねばならない。（平成十二年五月五日稿）

注

（1）これらの作品については、拙稿「大伴家持と池主の贈答―池主の戯歌を中心に―」（『萬葉』第百四十八号）、「大伴家持と越前遷任後の池主―天平勝宝元年の贈答をめぐって―」（『萬葉』第百六十号）参照。

（2）「家持の桃李の歌」（『小島憲之博士古稀記念論文集古典學藻』所収）、「越の路のふたり―家持・池主と「山柿之門」―」（『青木生子博士頌寿記念論集上代文学の諸相』所収）

（3）注（2）「家持の桃李の歌」参照。

（4）「転換期の家持―「臥病」の作をめぐって―」（『稲岡耕二先生還暦記念日本上代文学論集』所収）

（5）橋本達雄氏『大伴家持作品論攷』（「家持と池主―二首の賦とその敬和について―」）、『萬葉集全注　巻第十七』参照。

（6）本稿では、周一良氏「敦煌写本書儀研究（之二）」（『魏晉南北朝史論集続編』所収）の書儀分類の用語にしたがう。

（7）池主の書簡文と書儀との関連については、小島憲之氏『萬葉以前―上代びとの表現』（第八章「海東と西域―啓蒙期としてみた上代文学の一面―」）に指摘がある。

（8）本人が「隠り居」と詠んでいる例ではないが、病臥するありさまを同じように捉えている作品として、「松が枝の地（つち）に着くまで降る雪を見ずてや妹が隠り居るらむ」（20・四四三九　石川命婦）がある。左注には「于レ時、水主内親王、寝膳不レ安、累日不レ参。因以二此日一、太上天皇勅二侍嬬等一曰、為レ遣二水主内親王一、賦レ雪作レ歌奉献者。……」とあり、水主内親王の病臥するさまを「隠り居るらむ」と詠んでいる。彼女が薨じるのは、天平九年八月二十日（『続日本紀』巻十二）であるから、「更贈歌一首」に先行する用例となる。

（9）異文がもつ問題については、武田祐吉「『元暦校本萬葉集』巻第十七の一考察」（『国文学研究　萬葉集篇』武田祐吉著作集第五巻）、小島憲之氏『上代日本文学と中国文学　中』（第十章　天平期に於ける萬葉集の詩文）、木下正俊氏「巻十七の対立異文の持つ意味」（『萬葉』第四十六号）などを参照。なお、家持の二月二十九日付書簡文起筆に認められる「且得二消損一」に対して「且消損所レ備」（元暦校本赭、京都大学本赭）なる異文については、ふたつ

の書簡文末尾の異文とは異なり、歌との関わりを持たないため、同一に扱わない。ただし、この部分の異文と本文との関係は、後に考察を加える「更贈歌一首」に存する異文と性格を同じくし、恐らく本文に対する初案と捉えるべき表現と考えられる。

(10) 芳賀紀雄氏「萬葉五賦の形成」(『伊藤博博士古稀記念論文集萬葉學藻』所収)参照。

(11) 注(9)参照。

(12) 阪倉篤義「歌物語の文章―「なむ」の係り結びをめぐって」(『文章と表現』所収)参照。

(13) 金井清一氏「大伴家持の長歌―花鳥諷詠長歌の機能とその成立契機―」(『万葉詩史の論』所収)

(14) 奥村和美氏「「相歓歌」二首における家持の方法」(「国語国文」第六十五巻第十二号)参照。

付記 成稿に際して、終始、芳賀紀雄先生の御指導を賜りました。なお本稿は、第31回萬葉有志研究会(平成十一年十一月二十日、高岡市萬葉歴史館)における口頭発表に基づく。席上、御教示御意見を賜った先生方にあつく御礼申し上げます。さらに、編輯委員会の先生方からも貴重な御教示を頂戴しました。末尾ながら、ここに記して、深く謝意を表します。

(にし かずお・筑波大学大学院文芸・言語研究科博士課程)

助動詞「り」の承接語形について

佐野宏

はじめに

助動詞「り」の承接語形については、同一の語原形(連用形＋あり)から母音融合を生じて「e_1語形」となる縮約形(置き＋あり＞置けり)の他に、母音脱落を生じて「a語形」となる脱落形(置き＋あり＞置かり)の例も東国語などに認められる。これを従来、東国語の「a語形」が古形で「e_1語形」は後発とみる見方が行われている。母音脱落と母音融合とのいずれが音韻現象として先行したかという問題をしばらくおくとして(1)、巨視的にみれば、確かに「a語形」よりも「e_1語形」が優勢であり、「り」直上の語形態は「e_1語形」へと収斂しているという事実がある。助動詞が承接する場合に、動詞の活用形を制限するのはよく知られているけれども、「り」はその成立において縮約形の見かけ上の語尾であるから、語原形の語構造が保持されていれば、形態が「a語形」「e_1語形」のいずれであっても語原形の意味は変化せず問題はないはずである。少なくとも、この点では「e_1語形」へと収斂する理由はない。では、なぜ「a語形」は捨てられたのであろうか。この問いは、逆に「り」が縮約形から助動詞へと転成する様相を明らかにすることにも通じよう。本稿では「り」の承接語形が「e_1語形」に収斂していく様相について考察したところを述べる。なお、以下実例を示さないで挙げる場合、上代特殊仮名遣い甲・乙類を「ケ^1」「ケ^2」のように、1・2によって表す。

一　助動詞「り」の承接語形

「り」が「あり」を含む縮約形であることの顕著な例としては、次の①・②のように、カ変「来」・上一段「着」に「あり」が後項要素として複合した場合であろう。

①見まく欲り思ふ間に玉づさの使の家礼(け)ばうれしみと吾が待ち問ふに　(萬17-三九五七)

②我が旅は久しくあらしこの吾が家流(け)る妹が衣の垢つく見れば

（萬15-三六六七）

右の「ケ」[1]という語形はカ変・上一段のいずれの活用形式にも該当しない。現在、これらについては助動詞「り」とは認定しないようであるが、①は「使いが来たら」という完了の意であるし、②は「着ている」という存続の意であるから、アスペクトを「り」が表しているといえる。次の例では、

③人の身は得難くあれば法の為の因縁と奈礼利　努め諸々
進め諸々　（仏足石歌18）

④久方の月は照りたり暇なく海人の漁火は点し安敝里見ゆ
（萬15-三六七二）

「e_1語形」に「り」が接続しており、③④ともに動作の結果状態としてアスペクトを明示しているといえ、①②と比較しても、大きく異ならない。

こういった「e_1語形」となる場合の他に、前節にふれたように「a語形」となる場合がある。

⑤筑波嶺に雪かも布良留否をかもかなしき児ろが布保佐流か
も　（萬14-三三五一）

⑥筑紫辺に舳牟加流船のいつしかも仕へまつりて国に舳向か
も　（萬20-四三五九）

(2)これらの例を助動詞「り」と認めない見方もあるが、意味上、⑤は「降っているのか」「干しているのか」であり、⑥は「舳が向いている」という、動作・状態の存続を表していると考えられる点で、先の①～④と大きな差はない。

右のような承接語形の「a語形」と「e_1語形」との関係について、佐伯梅友氏は東国語の例を、

これは、この言い方の発生の時の姿を残しているものではないかとも想像せられる。例えば、「降りあり」「乾しあり」が約まるとすれば、「降らり」「乾さり」となるのが自然であると考えられるからである。果たしてそうであるならば、中央語の「降れり」「乾せり」という言い方は、後に変つて出たもので、東国語にその古形を残しているということになる。
（佐伯［一九五〇］）

とするように、「a語形」を古形とみている。けれども、東国語においても、次に挙げる例のように、全体としてみれば「e_1語形」が優勢であるという事実がある。

⑦利根川の川瀬も知らず直渡り波にあふのす安幣流君かも
（萬14-三四一三）

⑧この川に朝菜洗ふ子汝れも我れもよちをぞ母弖流いで子給
りに　（萬14-三四四〇）

⑨うらもなく我が行く道に青柳の萌りて多弖礼ば物思ひ出つ

も　（萬14-三四四三）

このことについて柳田征司氏は、

四段活用動詞などの連用形＋アリの結合における音転化が、古くiを落として「aり」となり、後、転成を起こして「eり」となったとする説がある。しかし、その説に立つと、なぜ「aり」形が「eり」形に転じなくてはならなかったのかを説明しなくてはならないが、それは容易ではないように思われる。　（柳田［一九九三］）

として、佐伯氏とは異なり、共時的なエ列甲類とア列とのe_1＝aという、方言的な母音転化ではないかとする。確かに、/a/と/e_1/とが交替する例として東国語（防人歌を含む）の内部では、

a－e_1／e_1－aの例（上段：中央語に一致するもの－下段：東国語として認定されるもの）

カ夜（萬14-三四九九）－カ曳（萬20-四三二一）

ナセノコ夜（係助詞　萬14-三四五八）－トチハハ江（萬20-三四四〇）

サ要ダ（小枝　萬14-三四九三）－　コ夜デ（同）

サエ太（小枝　萬14-三四九三）　－　コヤ堤（同）

イ敝（家　萬14-三四二三）－イ波（萬20-四四六一／四四二七）

ヤマト敝（格助詞　萬14-三三六三）－ツクシ波（萬20-四四二八）

などがあり、[3] 中央語内部においても用例は少ないながら、

山乃波（端　萬15-三六二三）－幣都那美（辺　記神代）

迦豆岐勢那和（助詞ワ　記仲哀）－倶流之衛（助詞ヱ　天智紀）

笑和良布（新訳華厳経音義私記）－恵良伎（歓喜　続紀第三八詔）

などを挙げることができる。

柳田氏が指摘するように、「り」の承接語形として「a語形」「e語形」とが共時的に共存しているという見方は、確かに魅力的ではある。しかし、［i_1a→e_1＝a］という場合に、母音脱落・母音融合を生じた後の母音がさらに転化又は交替するというような例を見つけにくいという点でやや問題がある。

佐伯説は、柳田氏が説くように二段階の変化（［i_1a→a→e_1］）を想定しているとも解されるけれども、「a語形」が古形であるというのは［i_1a→a］から［i_1a→e_1］へという、通時的変化を想定しているとも考えられる。そこで、音韻変化としては「り」の語原形からすれば、理論上、母音脱落と母音融合とのいずれもが想定できるのであるから、これらを共時的に捉えて、脱落形「a語形」と縮約形「e_1語形」とは共存していたが、何らかの理由によって「e_1語形」のみが残ったとみた方がよいのではないか。つまり、［i_1a→a・e_1］から［i_1a→e_1］へという変化の可能性が残されているように思われる。そのようにみれば、例えば、助動詞「け

り」の例として、

ウラニデニ家里(萬14-三三七四)―アカツキニ迦理(萬20-四三八八)

とあるのも、中央語と東国語との母音転化例ではなくて、「り」の「a語形」と「e_1語形」とが共存していた可能性を示すものとみることができよう。

また、後世の例ながら「a語形」と「e_1語形」とが共存する可能性を示す例として『古今和歌集』の次の例が参考になる。

春霞　たてるやいつこ　みよしのゝ吉野のやまに雪はふりつゝ

(『古今和歌集』春上・三　よみ人しらず)

右の第二句「たてる」には本文に異同があり、比較的に古い写本には「たたる」であった蓋然性が高い。その異同を示せば、高野切・元永本・伝公任筆本では「たゝる」とあり、筋切・静嘉堂文庫伝為相本では「たゝる(イて)」とし、雅経筆本・前田家本・伏見宮本・永暦二年俊成本・昭和切・家長本などでは「たてる(イた)」とある。この点について『古来風躰抄』(初撰本)に、

春かすみたゝるやいづくみよしのゝよしのゝ山に雪はふりつゝ

この歌は、「たてる」とかきたる本も侍れど、よき本にはみな「たゝる」とかけるなり、歌のたけ、すがたなどいみじく侍をいまのよには「たゝる」のことばのふりにたるなるべし、「たてる」にては又余りつよくて、しなのおくるゝなるべし

(日本歌学大系所収　穂久迩文庫本)

とあり、「立てる」よりも「立たる」の方が古語であるという認識があったことを窺わせる。増田繁夫氏はこれらの用例を詳細に分析した上で『古今和歌集』成立当時の和歌には「古語というべき「立たる」を用いることがあったのではないか」(増田〔一九九九〕)としている。(4) 右の『古今和歌集』の例は、平安時代の散文にみられる「持たり」などとともに「持ちたり」「立ちたり」の音便無表記という可能性もある(佐藤〔一九六五〕)けれども、増田氏も指摘するように『萬葉集』の「たゆたふ浪に立有白雲」(萬7-一〇八九)「鞆の浦廻に浪立有見ゆ」(萬7-一一八二)などの「立有」を西本願寺本・神宮文庫本・細井本では「タタル・タタリ」と訓むことを考えあわせれば、「り」の承接語形として「a語形」と「e_1語形」とが両方可能であるという共通了解が後世あったものと考えられる。こういった例は、前掲の『古来風躰抄』が示すとおり、和歌の享受という観点が関与しているために、ただちに、奈良時代の「り」の用例とするわけにはいかないが、古写本の在りようが示すように、時代が下るにつれて「立たる」という「a語形」から「立てる」の「e_1語形」へと収斂している点は注意さ

れてよい。

ところで、「り」の承接語形に「a語形」と、「e_1語形」とがあることについては、「り」の語源に対する解釈とともにさまざまに論じられている。春日和男氏は「り」が「e_1語形」を承接語形とすることについて、

同じア列音に膠着して既に語としての構成を緊密に果たしてゐるものに、接尾語ルがあつたことを思へば、このル語尾と意味上の混乱を避けるといふ純音韻論的目的に沿ふ為にまづ起こつてゐるのかもしれない。（春日〔一九七八〕）

として、接尾語「ル」との関連を指摘するが、「猶熟考の必要は認める」として保留された。(5) 同様の指摘は、吉田金彦氏が、

ただ憶測を加えれば、受身の助動詞の発達と区別されるためには、「り」の接続法に一大変革が行われなくてはならなかった。（吉田〔一九七三〕）

として、春日氏よりもやや踏み込んで、助動詞「る」の成立と助動詞「り」の承接語形が「e_1語形」に収斂することとの関連を指摘している。(6)

右の春日・吉田両氏の指摘は、その後検証されることがないようであるが、「り」の承接語形について考える上で示唆的である。というのも、それぞれ、派生形語尾「ル」、縮約形語尾「リ」という語構成要素でありながら、助動詞へと転成するという点では共通しており、いずれの場合も承接語形を限定することと深く関わると考えられるからである。

二　接尾語「ル」と縮約形語尾「リ」

従来、文法的意味を異にする助動詞間の形態を比較するということはあまり行われない。けれども、歴史的に、ある形式が成立するということは、そのために合目的的に環境が整ったというだけでなく、形式という共通性のもとに、他の形式にも影響を及ぼす可能性があることは想定されてもよい。その意味で、接尾語「ル」の様相を確認しつつ、春日・吉田両氏の指摘を検証してみよう。

派生動詞を形成する接尾語「ル」が、動詞の語末母音をア列にした「a語形」から分出する傾向があることは、阪倉篤義氏をはじめすでに指摘されている(阪倉〔一九六六〕)が、接尾語「ル」の様相を、その直上の母音に注意して分類を施すと次のようになる。用例の分類については、派生形の元となる原動詞の活用形式によって分類を施してある。

まず、四段活用の接尾語「ル」の用例から挙げる。なお、以下の挙例は煩雑になるのを避けて、代表的なものを実例とともに掲

出し、それ以外は異なり語のみを示す。

【接尾語「ル」（四段活用）】

①原動詞の活用形式が四段活用単独とみなされるもの

ツグ（四他）＞つがる（継：四自）

都藝弖久流（萬20-四四六五）／い都我里居れば（萬9-一七六七）

マス（四自）＞まさる（増：四自）

日に異に麻世ば（萬17-三九六九）／吾が恋麻左流（萬15-三七八一）

ハサム（四他）＞はさまる（挟：四自）

真鹿子矢を多婆左美添えて（萬20-四四六五）／雷撝〈波左万利天〉所レ捕（日本霊異記　上一話）

マツフ（四他）＞まつはる（絡：四自・下二自）

纏　力羽力禹反　合綿也綫也詮也　万豆不　又奴布（新撰字鏡　享和本／藤波の思纏（まつはり）若草の思ひつきにし（萬13-三二四八）、埃累の間に纏（マツハレ）て（大唐三蔵玄奘法師表啓　四行目）

右の例の他に、

フサグ（四他）＞ふさがる（塞：四自）

カガム（四自）＞かがまる（屈：四自）

カシコム（四自）＞かしこまる（畏：四自）

ツツシム（四自）＞つつしまる（慎：四自）

助動詞「り」の承接語形について

などがある。以上は、派生形語幹末尾がア列の例である。これら以外には、

シク（四自）＞しきる（敷：四自）

白波志苦志苦に（萬17-三九八九）／四寸流白波（萬6-九三七）

ク（四自）＞くくる（潜：四自）

立ち久吉鳴かぬ日はなし（萬17-三九一一）、自我手俣久岐斯子也（記神代）／枕ゆ久々流涙にそ（萬4-五〇七）

のように、派生形語幹末尾がイ列・ウ列になる例が一例ずつ見られる。

次に原動詞の活用形式が四段・下二段両様に活くものを挙げる。

②原動詞の活用形式が四段・下二段の両様に活くもの

カク（四他・下二他）＞かかる（懸：四自）

五百経る柯枳（雄略紀一二年）／真朴には真玉を加氣（記允恭）／もとな可可利て安寐し寝さぬ（萬5-八〇二）

ヘダツ（四自・下二他）＞へだたる（隔：四自）

白雲の千重に辺多天る筑紫の国は（萬5-八六六）／山こそば君があたりを敝（ヘダ）太弖（り）たりけれ（萬18-四〇七三）／浄土ト穢土トノ隔（は）何ぞ（東大寺諷誦文稿　一九〇行）

キハム（四自・下二他）＞きはまる（極：四自）

すめらへに伎波米尽くして（萬20-四四六五）／天雲の向伏す伎

波美(萬5-八〇〇)／垠　八方乃支波万利(新撰字鏡　天治本)

右の他に、

サク(四自・下二他)∨さかる(放：四自)
マク(四自・下二他)∨まかる(任：四自)
ヨス(四他・下二他)∨よさる(寄：四自)
カフ(四自・下二他)∨かはる(替：四自)
ソム(四自・下二他)∨そまる(染：四自)
ソナフ(四他・下二他)∨そなはる(四自)
シヅム(四自・下二他)∨しづまる(鎮：四自)

など、やはり派生形語幹末尾はア列であるものが多いが、ア列以外の例としては次のようなものがある。まず、エ列から派生するものとしては、

カフ(四自・下二他)∨かへる(返：四自)

裾のうち可比(萬14-三四八一)、償レ債〈母乃々カ比〉(日本霊異記上序)／この勢の山に可倍ば(萬3-二八五　一云)／可弊里見しつつ(萬20-四四〇八)

カク(四他・下二他)∨かける(懸：四自)

蜘蛛の巣可伎て飯炊くことも忘れて(萬5-八九二)／たすきを可氣(萬5-九〇四)／宇那賀氣里弖(記神代)、たづさはり宇那我既利ゐて(萬18-四一二五)

ハク(四他・下二他)∨はける(佩：四他)

太刀波吉て(萬20-四四五六)／人にありせば太刀波氣ましを(記景行)／汝が波氣流太刀になりても(萬20-四三四七　防人歌)

などが挙げられる。右の中で「カケル(懸)」の例は、下二段活用に「り」が接続した例とみる見方もある(阪倉〔一九六六〕)けれども、その場合に、例えば「たづさはり宇那我既利ゐて」と「ゐて(居)」に続く例があることから、「り」の意味が抽出しにくく、四段活用「カク(懸)」の派生動詞として扱う方がよいであろう。但し「ハケル(佩)」の例は、防人歌であり、いわゆる東国語でのエ列甲乙の混乱例として挙げる方が穏当であるかもしれないが、「カケル(懸)」の処理との整合性から、これも派生動詞として扱っておく。次に、オ列からの派生としては、

ヨス(四他・下二他)∨よそる(寄：四自)

天下止　与佐斯奉志(ヨサシタテマツリ)　(『続日本紀』五詔)／風のむた与世来る浪に漁りする(萬15-三六六一)／荒山も人し寄すれば余所留とぞ言ふ(萬13-三三〇五)

トトノフ(四他・下二他)∨ととのほる(整：四自)

撫でたまひ等登倍たまひ(萬19-四二五四)／竊六千乃兵乎発之等等乃比(続紀第二九詔)／其宮也雉整頓〈整頓止々乃保利曽奈波利弖〉(日本紀私記乙本：神代紀下)

ナグサム(四自・下二他)∨なぐさもる(慰‥四自)

恋名草六と人は言へど(萬11-二五六七)／名具佐米なくに(萬6-九六三)／名草漏こともありやと(萬9-一七五七)

などがある。

次に原動詞の活用形式が下二段活用単独とみなされるものからの派生形をみてゆく。

③原動詞の活用形式が下二段活用単独とみなされるもの

アク(下二自)∨あかる(明‥四自)

いまだ言はずて阿開にけり(継体紀七年)／八十伴の雄の島山に安可流橘頭挿にさし(萬19-四二六六)

アグ(下二他)∨あがる(上‥四自)

大和へに西風吹き阿宜て雲離れ(記仁徳)／照れる春日にひばり安我里(萬19-四二九二)

カサヌ(下二他)∨かさなる(重‥四自)

八つ着可佐祢(萬18-四一一六)／日の可佐奈礼ば(萬18-四一二三)

カタム(下二他)∨かたまる(固‥四自)

天地の可多米し国そ(萬20-四四八七)／重濁之凝(コリカタマリ)嶋難(神代紀上　兼右本)

これらの他に、

助動詞「り」の承接語形について

マグ(下二他)∨まがる(曲‥四自)

アツ(下二他)∨あたる(当‥四自)

シヅ(下二他)∨しだる(垂‥四自)

サフ(下二他)∨さはる(障‥四自)

ヲフ(下二他)∨をはる(終‥四自)

セム(下二他)∨せまる(迫‥四自)

タム(下二他)∨たまる(溜‥四自)

トム(下二他)∨とまる(止‥四自)

アヅク(下二他)∨あづかる(預‥四自)

マジフ(下二他)∨まじはる(交‥四自)

アツム(下二他)∨あつまる(集‥四自)

カラム(下二他)∨からまる(絡‥四自)

ハジム(下二他)∨はじまる(始‥四自)

ヲサム(下二他)∨をさまる(治‥四自)

アラタム(下二他)∨あらたまる(改‥四自)

などがあり、ア列からの派生が多い。ア列以外の派生としては、

ハス(下二他)∨はしる(走‥四自)

彎レ弓　驟(ハセ)レ馬而陽呼曰ニ猪有一(雄略前紀　兼右本)／鮎波之流夏の盛りと(萬17-四〇一一)

マズ(下二他)∨まじる(雑‥四自)

此即宮殿接(つぜ)二起(たて)於嶋大臣家一而(皇極紀四年　兼右本)／雪に末自例留梅の花(萬5-八四九)、新草麻自利(萬14-三四五二)

フスブ(下二他)∨ふすむる・ふすもる(燻：四自)

婢真枝足女　年廿八右眉後上布須閇「左鼻桁黒子」(大日本古文書　三　天平勝寶二年九月五日)／焰　明也烟氣也布須毛留(新撰字鏡　享和本。但し、天治本は「布須牟留」)

などが見られる。「フスモ$_1$ル」の例は、天治本の「フスムル」からの転化と思われ、「モ$_1$」は理論上オ列甲類であると推定される。

次に、原動詞が上二段・下二段両様に活くとみられるものを挙げる。

④原動詞の活用形式が上二段・下二段の両様に活くもの

コム(上二他・下二他)∨こもる(隠：四自)

出雲八重垣妻碁微に(記神代)、出雲八重垣妻語昧に(神代紀)／花橘を花其米に(萬17-三九九八)／山許莽例る大和しうるはし(景行紀一七年)

トドム(上二他・下二他・四他)∨とどまる(止：四自)

世の事なれば等登尾かねつも(萬5-八〇五)／流るる涙等騰米かねつも(萬19-四一六〇)／夕汐の満ちの登等美に(萬9-一七八〇)／留宅　止々万利須美伎(日本紀私記乙本　神代紀上)

次に原動詞が上二段活用単独とみなされるものを挙げる。

⑤原動詞の活用形式が上二段活用単独とみなされるもの

スグ(過：上二自)∨すぐる(優：四自・下二自)

久しき時を須疑にけるかも(萬15-三六〇〇)／切り髪のよちこを過ぎ橘の末枝を須具里(萬13-三三〇九)／異秀〈勝也　須久礼尓多流　又云備伊弖尓多流〉(日本霊異記　中二話)

オク(上二自)∨おこる(起：四自)

靡き於已立ちその根は失せず(顕宗前紀)／水源の法の於古利し飛ぶや鳥(「東大寺要録」続々群書類従本)

オツ(落：上二自)∨おとる(劣：四自)

足結の小鈴淤知にきと(記允恭)／拙劣や我に於止礼る人を多み(仏足石歌13)

以上が、筆者が確認できた四段活用の接尾語「ル」の確例である。

接尾語「ル」には他に下二段活用の例がある。次に例を挙げる。

【接尾語「ル」(下二段活用)】

①原動詞の活用形式が四段活用単独とみなされるもの

ウム(四他)∨うまる(産：下二自)

大和の国に雁子牟と聞くや(記仁徳)、以三為生〈宇牟〉二成国土一奈何(記神代)／我が中の産(うま)礼出でたる(萬5-九〇四)

ムスブ(四自)∨むすぼる(結：下二自)

わぎもこが牟須比し紐は(萬15-三七一七)／思ひ牟須保礼嘆き

つつ（萬18-四一一六）

マツフ（四他）∨まつはる（絡：下二自・四自）

埃累の間に纏（マツハレ）て（大唐三蔵玄奘法師表啓　四行目）

②原動詞の活用形式が四段・下二段両様に活くとみなされるもの

ウク（四自・下二他）∨うかる（浮：下二自）

瑞玉盞に宇伎し脂（記雄略）／船宇氣するて（萬17-三九九一）／津守網引の浮の緒の得（うかれ）干か行かむ（萬11-二六四六）

ワク（四自・下二他）∨わかる（分：下二自）

千重をおし和氣（萬17-四〇〇三）／和加礼なむ（萬5-八九一）

③原動詞の活用形が下二段活用単独、上二段活用単独のもの

スツ（下二他）∨すたる（廃：下二自）

身をば厭ひ須都べし（仏足石歌19）／是以官無ニ廃（スタレタル）事一（崇神紀一二年　兼右本、北野本は「スタルル」）

スグ（過：上二自）∨すぐる（優：下二自・四自）

異秀〈勝也　須久礼尓多流　又云備伊弖尓多流〉（日本霊異記　中二話）

ワブ（上二自）∨わぶる（侘：下二自）

思ひ和備つつ（萬4-六四六）／思ひ和夫礼て（萬15-三七五九）

以上が、下二段活用の接尾語「ル」の確例である。

さて、これらの例を原動詞の活用形式別に異なり語数によって示したものが次の表1である。なお、四段活用の接尾語「ル」の例として挙げた「フスブ∨ふすもる、ふすむる」、「ル」に四段活用と下二段活用と両方が存在する「マツフ∨まつはる」「スグ∨スグル」などの例は、後の表2との関係からそれぞれ一例ずつとして数えている。

（表1）接尾語「ル」（四段／下二段）を分出する場合の原動詞の活用種類

接尾語「ル」の活用種類	原動詞の活用種類 四段活用	四・下二段	下二段活用	上二・下二段	上二段活用	接尾語「ル」の用例総数
四段活用	10	16	23	2	3	54
下二段活用	3	2	1	0	2	8
総数	13	18	24	2	5	62

まず、表1からは、接尾語「ル」は四段活用であるものが多いことが知られる。次に、原動詞の活用形式別に接尾語直上の母音（派生形語幹末母音）の種類をみたものが次の表2である。

（表2）ル接尾形式動詞の語幹末韻（接尾語「ル」直上の母音）の種類

原動詞の活用形式の別	接尾語直上の母音の種類（異なり語数）						原動詞の活用形式別の総数
	a	i_1	i_2	u	e_1	e_2	o_1	o_2	
四段活用	10	1	0	1	0	0	1	0	13
四段・下二段	12	0	0	0	1	2	0	3	18
下二段活用	20	2	0	1	0	0	1	0	24
上二段その他	1	0	0	3	0	0	0	3	7
総数	43	3	0	5	1	2	2	6	62

助動詞「り」の承接語形について

右の表2から、接尾語「ル」の派生形式において、派生形語幹末母音は/a/となる頻度が高いことが知られる。

既にみたように、接尾語「ル」の派生形に、総じて三音節以上の語が多いということは、「あり」を後項とする縮約形の音節数とほぼ同程度であることが予想される。この派生形形態と東国語での「a語形」に承接する「リ」とを比較した場合、春日・吉田両氏が指摘するように、形態的にみれば、終止形以外では同形になってしまう。また、釘貫亨氏が指摘するように「り」「たり」などの存在詞を含む縮約形の助動詞が、連体形での使用頻度が高く、連体形においてほぼ同時期に成立した可能性がある(釘貫[一九九九])ことを考え併せれば、接尾語「ル」と「リ」の「a語形」とは、形態上きわめて近似することになる。さらに、接尾語「ル」直上の母音がエ列であることがア列であることに比べて少ないというのも注意される(7)。これは、動詞の派生形式においては「e_1語形」よりも「a語形」の方が機能負担量が大きいことを示している。つまり、「リ」は接尾語「ル」との形態上の弁別という点で、「a語形」を捨てて、派生動詞の形式との衝突が少ない「e_1語形」へと収斂してゆく蓋然性が高いといえる。

三　助動詞「る」と助動詞「り」の承接語形の成立

前節で検証したように、「リ」の「a語形」は、接尾語「ル」との競合から捨てられる可能性が高く、結果として「e_1語形」へと収斂するのだと考えられる。ところが、ここで問題となるのは、何故、東国語でア列語形「降らり」「干さり」という「a語形」の例があるのかという問題である。形態弁別上の競合という点においては、接尾語「ル」の様相からして、早くに「リ」の承接語形として「a語形」は消滅したはずである。しかし、実際には、接尾語「ル」を伴う派生動詞と、「リ」のア列承接語形とが共存していることからすれば、この点は明らかにする必要がある。これを筆者は、接尾語「ル」と「リ」との語構造の違いと考える。

「リ」は、四段系強活用動詞連用形に「あり」が下接した複合語の縮約形語尾であるから、音韻変化として「a語形」か「e_1語形」のいずれかが生じる。縮約形に語原形の語構造が保存されることは、脱落形相互に形態類推が生じることから知られる(佐野[一九九九])。この点で、「リ」直上の形態は、「a語形」「e_1語形」のいずれであっても、語構造から後項が「あり」であることは認識されるものと考えられる。一方、接尾語「ル」は派生語尾である点で「リ」のような語構造を有していない。強いていうな

らば、原動詞の品詞性を派生形語幹―形状言形態―に語彙構造[8]として含んで、原動詞との派生関係を保っているということになろう。したがって、原動詞との派生関係を弁別する指標は、ひとまずは接尾語「ル」それ自体にあるといってよい。

つまり、「リ」と接尾語「ル」とがそれぞれに語原形・原動詞の語構造を保持する限り、形態的に近似しても互いに競合することはない。これが、東国語にみられる「リ」の「a語形」と、接尾語「ル」とが共時的に共存する理由であると考えられる。

ところが、接尾語「ル」と縮約形語尾「リ」とを通時的にみた場合には、両者は共存しにくいものと考えられる。

まず、接尾語「ル」が、ヴォイス形式の助動詞「る」へと転成する場合を考えると、助動詞として成立するということは活用語の承接語形を限定し、機能的に卓越した文法形式として成立することであるから、派生形語幹は承接語形へと、その語形を限定されることになる。接尾語「ル」による派生動詞では、派生形語幹を「a語形」とするものが最も多い。このことは、接尾語「ル」が積極的な造語成分として成立していることを示しており、その場合には「動詞a語形＋ル」という構造が与えられているとみることができる。この構造が成立した時点を、接尾語「ル」の助動詞化として捉えることができよう。ここにおいて、派生形語幹は承接語形として「a語形」に収斂していくことになるのである。

これに対して、縮約形の見かけ上の語尾「リ」が、アスペクトの助動詞「り」へと転成する場合、接尾語「ル」の場合と同様に、縮約形の同一形態素としては、「リ」の直上で分析される可能性がある。それは、「リ」の縮約形形態に「動詞＋り」という構造が与えられることを意味する。が、しかし、語原形を「てあり」とする「たり」とは異なって、「て」を介さない「り」は、それ単独ではアスペクト形式としては不安定であった。なぜならば、形態的に類似する接尾語「ル」が四段活用の接尾語として成立しているからである。さらに、「あり」を後項とする複合語にあっては、母音脱落条件からすれば、語頭の最広母音/a/が脱落する可能性は低く、事実、脱落した例は見いだせない(佐野［一九九九］)。つまり、「リ」はそれ単独では形態素として成立しにくいと考えられる。このことは、「リ」が形態類推によって造語する場合においても、脱落形形式の「―aリ」か、縮約形形式の「―e_1リ」という語形のいずれかしか取り得ないことを示している。したがって「リ」は新たに造語する成分としても、脱落形・縮約形の語構成に依存せざるを得ない。こういった中で、接尾語「ル」が「a語形」を承接語形として収斂してゆくという状況が、「リ」の「a語形」による弁別力を減退させたと考えられるのである。こ

れは、「a語形」のもつ文法上の機能負担量が増大したことと表裏をなしている。その結果、「り」は承接語形を「e_1語形」に限定してアスペクト形式の指標としたのだとみてまず問題がない。ところが、その「e_1語形」は、シンタクス上、助動詞を分出しない命令形と一致するために、ついに動詞の活用形―例えば、連用形―としては組み込まれず、結果的に「り」は、縮約形という形式に依存しながら「―e_1リ」語形として助動詞化することになるのである。

このように考えれば、「り」を生じる縮約形と接尾語「ル」を分出する派生形とが競合するのは、接尾語「ル」が承接語形を限定する時期であったといえる。(9)

おわりに

以上の考察をまとめれば、「り」が承接語形を「e_1語形」に限定することの理由には、接尾語「ル」との弁別のためであったということになる。ところが、「り」が縮約形のまま助動詞化したことは、「り」を助動詞としては特殊なものにしてしまった。それは、文法機能としては、アスペクト形式の一翼を担いながら、承接語形が活用形としては認定されない縮約形であったために、語原形の語構造を直ちに消失できないという点である。つまり、「り」は、承接語形(e_1語形)を弁別表象とする助動詞なのであった。これが機能的に卓越できなかった、一つの、しかし多分大きな要因なのであろう。「り」が下二段活用に接続したと説明される例に、

鯵　魚乃曽己祢太ゝ礼留(新撰字鏡　享和本)
噎　太奈久礼利　又久留(新撰字鏡　天治本　享和本には「太奈久毛礼利」)

などが挙げられる(阪倉[一九六六])。この場合に、「り」の接続している連用形末尾が奈良時代にすでにエ列甲乙の書き分けがないラ行音であったことは、「り」が承接語形に依存的であったという特殊性をよく示している。(10) したがって、四段系強活用動詞や上二段活用、エ列乙類となる下二段活用の連用形に「り」が直接しないのは、「り」の成立に大きな要因があったものと考えられる。この用法上の制限が「たり」にその位置をゆずってゆく要因にもなっている。

このようにみれば、「り」は、承接語形を「e_1語形」へと限定せざるを得なくなった時点で、いわば助動詞としての真面目を得た時点で、実はその命脈が絶たれる運命にあったものと考えることができる。

従来、文法範疇を異にする助動詞の形式は、個々の形式として

扱われる傾向がある。しかし、ある文法形式の成立が他の形式をどのように制限したか、あるいはどのような影響下にあったかということは、言語の歴史をダイナミズムとして捉える場合には重要な視点であろうと思われる。その意味において、「り」の承接語形をめぐる様相は、複合語から助動詞が成立する過程と、派生動詞から助動詞が成立する過程とが、助動詞化に伴う承接語形の決定において、互いに干渉し合う場合として位置づけられる。

注

(1) 母音融合と母音脱落との音韻史上の関係について、山口〔一九八五〕が母音融合が古く、母音脱落が新しいとするのに対して、柳田〔一九九三〕は母音融合と母音脱落とが同じ時期に起きていた可能性を示している。筆者は、「り」の承接語形の様相を捉える中で、奈良時代にあって、母音融合形も母音脱落形もいずれでも語原形の語構造が当時において認識されていると見られることから、両現象が共存していた可能性が高いと考える。

(2) 福田良輔氏は、「布良留(降らる)萬14-三三五一」「保佐流(干さる)萬14-三三五一」「於波流(生はる)萬14-三五〇一」「奈与母波里曽祢(なよ思はりそね)萬14-三五二六」「与佐礼(寄され)萬14-三四七八」などに、その終止形を示す用例がないことから、これらの「り」は、ラ変語尾ではあり得ないとする。そして、「東歌および防人歌に見える原動詞のア列音につくラ行音の活用語尾は従来説かれているようないわゆる完了の助動詞ではなくて、四段に活用する接尾辞ないし、複語尾と見るべきものである」(福田〔一九六五〕)と述べる。

(3) 但し、エ列甲乙の別が確認できるのは、「ハ—ヘ」[1]の場合のみである。

(4) 増田氏は他に東国語に由来するかとしながらも、風俗歌の「遠方」の例を挙げている。

をちかたや　かの方や　安達の原に　多々流可良尓(立たる幹に)宇和流可良尓(植わる幹に)己を似寄する　さ寝しとなくに(以下略)

(5) 春日氏は、東国方言ではラ行四段系のル語尾と、ラ行変格系のリ語尾(完了の助動詞)が接続形態において、未分化の状態にあったとみて、両者の語源が同一であった可能性を指摘しつつ、「中央語は東国語よりも一歩進化してゐると考へたいのである」とする。

(6) 吉田氏は「り」の「e_1語形」について、

これは、四段動詞における突然変異的な下二段化現象ともいうべきものであって、古代語「り」が完了語として生存するための一つの適応であった。(吉田〔一九七三〕)

とする。下二段化現象ということについては氏の具体的な論証が

なされていないので、この点は直ちに首肯し難い。

（7）接尾語「ル」に限らず、派生形語幹末母音がエ列である動詞は多くは存しない。次の表3は奈良時代の動詞活用形式別に派生動詞を分類し、その派生形語幹末母音によって分布を調査した結果である。空欄はその用例が管見では見つけにくいことを示し、○印は少なくとも一例以上の用例が確認できることを示す。

（表3）原動詞から一音節接尾語を分出した派生動詞の語幹末母音の種類

原動詞の活用系列	派生動詞語幹末韻の種類						
	ア列	イ列甲	ウ列	エ列甲	エ列乙	オ列甲	オ列乙
四活	○	○	○			○	○
下二活		○	○	○	○	○	
四・下二			○	○	○	○	○
上二活		○	○			○	○
上一活		○				○	

奈良時代の動詞派生形式についての具体的な検討は別稿にゆずるが、右の表3で注意されるのは、原動詞の活用形式が四段活用単独である場合と下二段活用単独である場合とを比較すると、四段動詞では派生形語幹末尾母音をエ列とするものがなく、オ列乙類になるものが見られるのに対して、下二段動詞では、逆にエ列から派生するが、オ列乙類となるものが見られないという点であろう。この対立は、四段・下二段両様に活用する原動詞では解消されるようである。

次に派生形語幹末母音がエ列であるものの中、接尾語「ル」以外の例とその原動詞とを示す。

【セム(責)下二他―セメグ四自】

科之以二千座置戸一、遂促徴〈促徴　世免波多留〉（日本紀私記乙本　神代紀上）、怯怕　急務也　於比由　又己ゞ呂毛止

奈我□　又世牟（新撰字鏡　天治本）／俱　又很作　違也不側也顔也恨也暴也　世女久　又伊加留　又加太久奈　□万ゞゝ志　（新撰字鏡　天治本）

【シム(標)下二他―シメス(示)四他】

背子が之来けむ（萬19-四二二三）／人に之賣須な（萬15-三七六五）

【ク(消)下二自―ケツ四他】

梅の花早くな散りそ雪は氣ぬとも（萬5-八四九）、降る雪を火もち消つつ（萬3-三一九）／燈燼　謂火滅為燈燼火餘木治火　介知宇佐无（新撰字鏡　天治本　但し、享和本では「介知乎佐无」とある。）

【ウク(受)下二他―ウケフ四他】

参り来て命受例ば（萬16-三八八六）、風に散る花橘を袖に受て（萬10-一九六六）／令宇気比白　因拝此大神　（記垂仁）

【ムス(咽)下二自―ムセフ四自】

心のみ咽乍あるに(萬4-五四五)／牟世比つつ(萬20-四三九八)

【アル(荒)下二自―アレブ四自・上二自か】

夜床も荒らむ一云阿礼奈牟(萬2-一九四)／神等の伊須呂許比阿禮比座すを、言直し和し古語云夜波志(祝詞大殿祭)

但し、エ列甲乙が確実に知られるのは、「シムーシメス」「ウクーウケフ」の場合のみである。

(8) ここにいう、「語彙構造」とは語構成要素に与えられる品詞性を指している。一般に文において品詞を決定できない要素として、語構成要素はあるけれども、品詞が決定されない意味を我々は知ることができない。いわゆる形状言と称される形態が品詞性を含むというのは、そこに品詞を与えるからであって、それは語彙上に文を想定することに他ならない。したがって、語構成要素は、語彙上に与えられた構造―語彙構造として品詞性をもつと考えるのである。

(9) 釘貫亨氏は、自他対応形式の発達を捉える中で、本稿で取り上げた接尾語「ル」の分出による派生形式(第Ⅲ群形式)は、比較的新しい形式であったのではないかと推定している(釘貫[一九九六])。なお、接尾語「ル」が助動詞「る」へと発達する様相については、語構成要素の語彙構造を考える上で重要な問題を含んでいる。就中、助動詞「る・らる」「す・さす」は、格助詞と相補関係にある点で注意される(森重[一九七〇])が、これらについては機会を改めて論じたい。

(10) 平安時代の訓点語における「り」について、築島裕氏は、

・天廟とイフハ是れ世天に宗ー事(ツカヘル)者を齋(サイ)祈の室なり (大日経疏巻第二)

・而も苦ー者　楽ー者　有(アラシメル)(リ)や (同右)

・〔蒙〕許サレラ者(ハ)…法(ノ)如(ク)脩造シテ虚(シ)ク費ヤ令(メ)不(シ) (大滋恩寺三蔵法師傳　二ノ二一一)

などの例から、平安時代以降は、「咲き+あり→咲けり」のような語源意識が薄れて「咲け+り」のような意識が次第に濃厚になり、それからの類推で右のような「ツカヘル」、「アラシメル」などの例が生じたとしている(築島[一九六九])。

〔文献〕

春日和男[一九七八]『存在詞に関する研究』風間書房

川端善明[一九七九]『活用の研究Ⅱ』大修館書店

釘貫　亨[一九九六]『古代日本語の形態変化』和泉書院

釘貫　亨[一九九九]「完了辞リ、タリと断定辞ナリの成立」『萬葉』171号

佐伯梅友[一九五〇]『奈良時代の国語』三省堂

阪倉篤義[一九六六]『語構成の研究』角川書店

佐藤定義[一九七〇]「「り」は助動詞か―その史的考察―」『月刊文

法』二月号
佐藤宣男［一九六五］「〈持てり〉と〈持たり〉」『国語学研究』5号
佐野　宏［一九九九］「母音脱落現象と語構成」『国語学』199集
築島　裕［一九六九］『平安時代語新論』東大出版会
福田良輔［一九六五］『奈良時代東国方言の研究』風間書房
増田繁夫［一九九九］「古今集の歌語と本文―「たたる・たてる」「あとらふ・あつらふ」「うらぶる・うらびる」―」『大阪市立大学文学部創立五十周年記念国語国文学論集』所収　和泉書院
毛利正守［一九七九］「萬葉集に於ける単語連続と単語結合体」『萬葉』100号
毛利正守［一九八二］「萬葉集・オモフの字余りと脱落現象」『親和國文』17号
毛利正守［一九八五］「萬葉集における縮約現象―「有リ」の場合―」『國語と國文學』62巻9号
毛利正守［一九八八］「上代日本語の音韻変化―母音を中心に―」『國語國文』57巻4号
森重　敏［一九七〇］『日本文法通論』風間書房
森重　敏［一九八四］『上代特殊仮名音義―五十音図的音韻体系の論―』和泉書院
柳田征司［一九九三］『室町時代語を通してみた日本語音韻史』武蔵野書院
山口佳紀［一九八五］『古代日本語文法の成立の研究』有精堂
吉田金彦［一九七三］『上代語助動詞の史的研究』明治書院

（さの　ひろし・大阪市立大学大学院・後期博士過程）

全国大会開催要項

○萬葉学会第五十三回全国大会開催要項

平成十二年度の全国大会を、平成十一年十月十四日(土)から十七日(火)まで、香川大学との共催により、左記の要領で開催いたします。会員諸氏の積極的なご参加をお待ちしております。

一　公開講演会

日時　十月十四日(土)　午後二時から五時三十分まで

会場　高松市立図書館（サンクリスタル高松）視聴覚ホール

高松市昭和町一―二―二〇

Tel〇八七―八六一―四五〇一

挨拶　香川大学学長　近藤浩二氏

講演

讃岐の国府と文学　香川大学教授　佐藤恒雄氏

聖なる時空　大阪市立大学名誉教授　井手至氏

二　懇親会

日時　十月十四日(土)　午後六時から八時まで

会場　香川大学　大学会館

会費　五千円

＊懇親会に参加ご希望の方はあらかじめお申し込み下さい。当日受け付けはいたしません。

三　研究発表会

日時　十月十五日(日)　午前十時から午後五時まで

会場　香川大学教育学部　四一五講義室

午前の部(午前十時より)

大伴家持の吉野讃歌と宣命　名古屋大学大学院生　新沢典子

柿本人麻呂「石中死人歌」考　奈良女子大学大学院生　村上亜紀

有間皇子自傷歌の表現とその質　椙山女学園大学　大浦誠士

午後の部(午前一時より)

序詞と歌の形式　筑波大学　白井伊津子

天寿国繡帳銘の成立年代をめぐって

―儀鳳暦による計算結果から―　東京大学　金沢英之

無標の動詞における可能の含意―上代を中心に―

神戸松蔭女子学院大学　吉井　健

松が枝を結ぶ心―活道の岡宴歌の論―

新居浜工業高等専門学校　森長　新

高橋虫麻呂の菟原處女の墓を見る歌について

奈良女子大学　坂本信幸

四　萬葉研修旅行

十月十六日(月)～十七日(火)　一泊二日

◇集合場所　JR高松駅広場「青鬼くん」石像付近

集合時間　午前八時四十五分（九時出発）

◇旅程

第一日

高松駅(集合)―讃岐国分寺―讃岐国府跡―沙弥島(狭岑の嶋)―カサデルマーク(昼食℡〇八七七―四六―二〇八八)―高屋塩釜神社等―崇徳院陵・雲井御所碑―善通寺・西行遺跡―花樹海(宿泊)

宿泊先　花樹海(はなじゅかい)

高松市西宝町三―五―一〇

℡〇八七―八六一―五五八〇

第二日

花樹海―屋島山頂―源平古戦場―空港グランドホテル(昼食℡〇八七―八七九―一〇〇〇)―冠纓神社(天治本萬葉集)―高松空港(一次解散　十四時三十分ごろ)―高松駅(二次解散　十五時十分ごろ　予定)

◇参加費　二万六千円

◇募集人員　八〇名

＊集合時間は厳守してください。

＊道路事情等によりコースを変更することがあります。また、解散時刻も遅れる場合があります。あらかじめご了承下さい。

〇研究旅行、懇親会、十五日の昼食（千円）のお申し込みは、郵便振替にて、内訳を明記の上、左記までお願いします。

郵便振替口座　〇一六一〇―五―二四九六七

名　義　萬葉学会第53回全国大会

なお、**挟み込みの振替用紙**をご利用いただければ便利です。

申込みしめきりは、九月二十日(水)としますが、研究旅行は定員になり次第、締め切りますのでお早目にお願いします。

〇問い合わせ先

高松市幸町一―一
香川大学教育学部　国語教育講座　岡内弘子
Tel&FAX〇八七―八三二―一四二五
〇八七―八三五―六五五〇

または

〒五五八―八五八五　大阪市住吉区杉本三―三―一三八
大阪市立大学文学部国語国文学研究室内
萬葉学会本部
Tel〇六―六六〇五―二四一三（村田研究室）
〇六―六六〇五―二四一四（毛利研究室）

＊出張懇請書をご入用の方は、返信用封筒・八十円切手を同封のうえ、学会本部（大阪市立大学文学部国語国文学研究室内）までお申し込み下さい。

○宿泊案内　次表（62ページ）参照。各自でお申し込み下さい。

○会場案内　次図参照

〈公開講演会場〉（十四日）

・ＪＲ高徳線「昭和町」（普通のみ停車）下車　徒歩三分
・バス　「高松築港」①乗り場（ＪＲ高松駅から徒歩五分）または「瓦町駅前」から昭和町経由の下笠居・香西線で「昭和町市立図書館前」下車
・高松駅からタクシーで十分弱　七〇〇円程度
・高松駅から　徒歩二十五分

〈研究発表会場〉（十五日）

・ＪＲ高徳線「昭和町」（普通のみ停車）下車　徒歩五分
・バス　「高松築港」①乗り場（ＪＲ高松駅から徒歩五分）または「瓦町駅前」から昭和町経由の下笠居・香西線で「幸町」下車　徒歩二分
・高松駅からタクシーで十分弱　七〇〇円程度
・高松駅から　徒歩二十五分

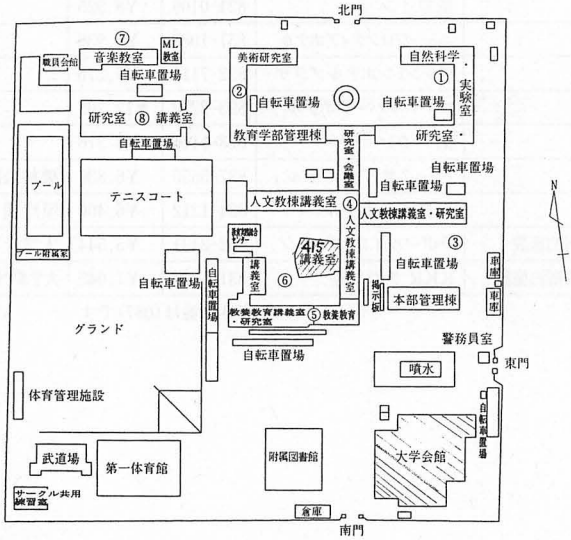
＊右に紹介したＪＲ・バスともに、一時間に二本程度しかありません。

＊車を利用される場合は、瀬戸大橋をご利用下さい。明石海峡大橋は、高松まで高速道路でつながっておりません。

香川大学案内図

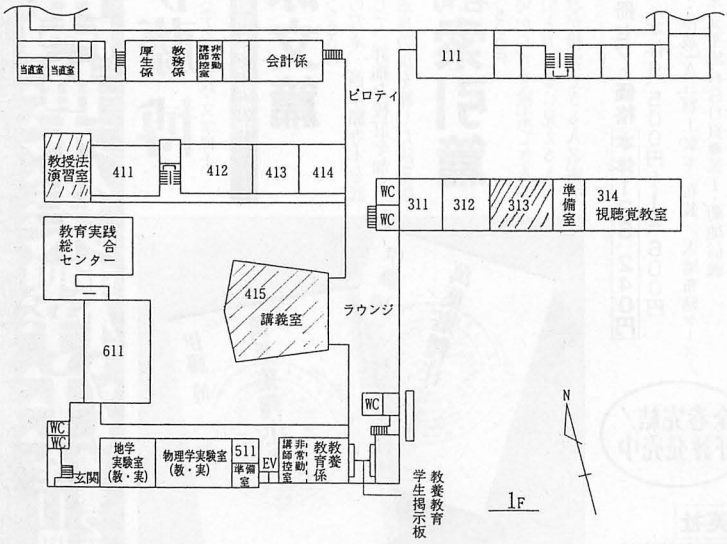
北
高松港
阪神・小豆島行
のりば
小豆島土庄・草壁・池田行
フェリーのりば
ヨットハーバー
JR
高松駅
大的場
健康体育センター
西の丸町
高松築港
玉藻公園
(高松城跡)
玉藻町
地検・高検
地裁・高裁
法務局
高松市中央郵便局
丸の内
高松中央卸売市場
浜ノ町
錦町
NHK
三越
片原町
兵庫町交差点
中央通り
丸亀町通り
ライオン通り
フェリー通り
JR予讃線
原町
高松工芸高校
市民会館
市役所
高松市美術館
番町交差点
至徳島
至坂出
高松市図書館
幸町
番町
高松高校
中央公園
南新町
昭和町駅
昭和町
香川大学
教育学部
西宝町
日赤
県庁
国税局
瀬戸内海放送
法学部
経済学部
中央病院
瓦町
琴電長尾線
ロータリー
宮脇町
北消防署
中新町交差点
農学部方面
NTT
石清尾八幡宮
栗林公園北口駅
栗林駅
JR高徳線
栗林公園
▲印　空港バスのりば
高松空港

講義室等配置図（教育学部）



○印内の数字は、号館番号を示す。

研究発表会会場拡大図



萬葉学会宿泊案内

	名　称	電　話	一泊料金	備　考
高松駅周辺	リーガホテルゼスト高松	822-3555	¥8,893	
	東急イン	821-0109	¥8,925	
	ニューフロンティアホテル	851-1088	¥6,930	
瓦町周辺	ワシントンホテルプラザ	822-7111	¥7,276	
	ロイヤルパークホテル	823-2222	¥12,705	
	第一イン	823-1111	¥8,316	
その他	パークサイドホテル	837-5555	¥6,830	栗林公園近く
	ホワイトホテル	834-1212	¥6,400	県庁前
公共学校共済宿泊施設	ラポールイン・タカマツ	862-2431	¥5,544	大学まで徒歩５分
国家公務員共済宿泊施設	KKR さぬき荘	831-5226	¥7,045	大学まで徒歩５分・朝食付き

市外局番は(087)です

●第11回「齋藤茂吉短歌文学賞」受賞

個人全注釈としては38年ぶりの偉業。万葉研究の潮流を変えた決定版。

萬葉集釋注

全11冊
補巻2冊

伊藤 博
筑波大学名誉教授・文学博士

●最新刊・好評発売中

原文篇

本体9,500円
最古の写本、西本願寺本を底本として、詳細な校訂を加え、現代最良の訓を施した決定版。

各句索引篇 人名索引篇

本体9,500円
どの句からでも検索できる各句索引と万葉集に見える人名から歌が検索できる人名索引。

全13冊セット価格 本体136,240円
各巻／本体9,500円～12,600円
［造本・体裁］A5判上製本・布装／天地布貼ケース／各巻本文平均650頁●装丁・菊地信義

※表示価格は本体価格です。別途、消費税が加算されます。

全巻完結！好評発売中

集英社
〒101-8050 東京都
千代田区一ツ橋2-5-10

編輯後記

○百七十四号をお届けします。先号では、締め切りが過ぎてからの学会案内となってしまいました。本号には、要項を掲げましたので、こぞって讃州へご参集下さい。今回も、発表申し込みが多く、またまた若い方を優先する結果となってしまいました。ただし、どこかの学会が大学院生ばかりであるのに較べると、まだまし方かとも思います。活発な義論を期待しています。また、発表をお願いできなかった皆様には、是非、論文にして投稿下さりますようお願い致します。

○巻頭には、伊藤代表のいつもとはちょっと異った論をいただきました。先々号の後記にふれられ、思うことしきりです。西氏のは、家持地主贈答歌群を総体的に捉えた意欲作、佐野氏のは、助動詞「り」に対する形態音韻論的再解釈、どちらも若い力を感じさせます。先の総選挙では、ご年配の力も大したものでしたが、若い力もまた強いものがありました。中間にいるわれわれももっと頑張らねばと、つくづく考えさせられます。

○本号で、編輯子の担当は終ります。次号からは、さらに若い編輯となります。どうかご期待下さい。ご協力ありがとうございました。

（乾善彦記）

◇お願い◇

1　論文の投稿、書籍・論文の御寄贈は、学会本部あてにお願いいたします。

2　年会費の納入および入会申込みは、そのむねを明記のうえ会費を郵便振替で「〇〇九〇〇―七―二九一四七　萬葉学会」あてにお送りください。

3　住所変更・改姓等の届出、本誌既刊号の購入等は、清文堂出版内　萬葉学会事務室あてにお願いいたします。

投稿規定

一、投稿資格は会員に限る。

一、内容は萬葉集とそれに関連する各分野の研究論文とする。

一、分量は原則として四百字詰原稿用紙三十枚程度（ただし「黄葉片々」欄は十枚以内）とする。

一、ワープロ原稿の場合は、字詰め・行数及び四百字詰め原稿用紙に換算した枚数を明記すること。論文採用の場合には、テキストファイルの提出をお願いする。

一、原稿は返却しない。採否決定は編輯委員会に一任のこと。

一、論文掲載の場合は、本誌十部を贈呈する。ただし、余分に入用の時は、あらかじめ申し出があれば実費でこれに応ずる。

萬葉学会会則

一、本会は、萬葉学会と称する。

一、本会は、萬葉集とそれに関連する各分野の研究を目的とする。

一、萬葉研究者・愛好者は誰でも申込みによって会員になることができる。

一、会員の研究発表機関誌として季刊「萬葉」を編輯・発行する。

一、本会は、年一回、公開講演会・研究発表会・研修旅行を中心とする全国大会を行い、随時、目的に沿う事業を行う。

一、会員は、年額四千円の会費（誌代を含む）を年度初め（四月）に納入する。

一、本会の本部を

大阪市住吉区杉本三丁目三番一三八号

大阪市立大学文学部国語国文学研究室内（郵便番号五五八―〇〇二二）

に置く。

一、本会の運営及び機関誌の編輯・発行は編輯委員会において行う。

一、本会に代表を置く。

一、本会は名誉会長を置くことができる。

萬　葉　第百七十四号
平成十二(二〇〇〇)年七月二十五日印刷
平成十二(二〇〇〇)年七月三十一日発行
頒価　一、〇〇〇円
送料　六〇円

編輯・発行
〒558-8585 大阪市住吉区杉本三丁目三番138号
萬　葉　学　会
代表者　伊藤　博
大阪市立大学文学部
国語国文学研究室内
電話　〇六(六六〇五)三四一四

発売所
〒542-0082 大阪市中央区島之内二丁目八番五号
清文堂出版株式会社　内
萬葉学会事務室
電話　〇六(六二一一)六二五五
振替〇〇九〇七-二九一四七